

頂に非方心推も勿く洲
き知共々を移東論人へ
たつ第にもに亞、々と支邦
いて一是つ関の苟は赴満人

特 220

411

の 盟 日
礎 交 満

始

行發部版出會協育教満日



保々隆矣著

日滿同盟の礎

日滿教育協會出版部



本書を
我等の
陵南會員諸子に呈す

自序

「日滿親善」の語は今や陳腐の氣持で迎へらるゝが、事實兩國民間に眞の盟友の情誼が結ばるゝは、さう手輕の業ではあるまい。

著者は久しく滿鐵に奉職し、事變前後の狀勢や、滿洲人の眞の氣持も知つて居るので、何とかして一日も早く、兩國人の關係が一段と良好に伸展し行くよふ日夜希願して居るものである。

本書は、右の見地からして、上編には無遠慮に「滿支人觀」を、下編には「日常の交際の心得」を述べたつもりである。正直の話が、著者は性懶惰で、滿鐵在職中も一向に支那語を學ばず、支那研究も不充分であつた。今日から考ふると「在滿時代にセメテこれ位でも知つて居たら」と後悔することが非常に

多し。

今や、滿洲や北支には若人が滔々として渡つて行く、而して、官界、民間に亘り重要な接觸が頻りに行はれて居るが、これ等の人々が、良く交ると否とは兩國の將來に甚大の影響がある、故に著者は是等の人々に著者が體驗するが如き悔なからむことを祈ると共に、後進への戒めとして、前車の覆轍を叙する氣持で本書を編著したのである。

幸に本書が座右に供へられ、多少の裨益ともなるを得ば著者の本懐である。若し夫れ、本書記述の華語及下編の細部に至つては協會同人及知友の助力によること多大である。一言附して謝意を表す。

昭和十一年三月

著者

目次

面白い實例……………(一)

- ◇手輕な日滿親善 ◇滿人不快の種子
- ◇吉凶象徴の轉倒

上篇—民性篇……………(九)

- ◇滿洲の人種別 ◇滿支人を支配する道教
- ◇形式と儀禮 ◇國家觀念について

- ◇一・盤散砂の民
- ◇生命より大切な面子
- ◇日滿人の子供の相違
- ◇面白い支那の裁判
- ◇漁色
- ◇没法子
- ◇自動車に轢かるゝ苦力
- ◇太古のまゝの滿洲の農民
- ◇商民―巧妙なる商賣道

馬賊物語

- ◇匪賊の種類
- ◇政治匪
- ◇在來の馬賊
- ◇馬賊の組織
- ◇掠奪行動
- ◇官兵と馬賊の商取引
- ◇利益の分配

(三九)

滿人を如何に指導すべきか

- ◇世界で鐵を最後に知つた國民
- ◇進歩を拘束されたる文明
- ◇滿洲の青年に寄す
- ◇盟交の途

(四七)

下篇―交際篇

挨拶

- ◇日常の挨拶
- ◇初對面の挨拶

(五七)

訪問

- ◇訪問の心得
- ◇受附

(六三)

- ◇着 坐
- ◇茶 座
- ◇回 拜 出

其他心得置くべき儀禮……………(七〇)

- ◇起立の禮
- ◇變な挨拶
- ◇變な挨拶と思はるゝもの
- ◇滿人は後日禮を言はぬ

支那料理の話……………(七一)

- ◇支那料理の特質
- ◇材料の様々
- ◇種類鑑別法
- ◇献立、注文及勘定

- ◇支那酒について
- ◇宴會
- ◇宴會へ案内する方法
- ◇席次の決定
- ◇開宴
- ◇挨拶する場合
- ◇日本人の缺點

敬稱……………(六九)

- ◇恁 生
- ◇閣下 兄、大人、等
- ◇現職官吏への尊稱
- ◇商人への敬稱
- ◇兄弟への敬稱
- ◇親友間
- ◇婦人への敬稱

進物……………(一〇六)

年賀及年中行事……………(一〇八)

◇正月……………◇竈祭

◇春聯……………◇五月節

◇仲秋節

結婚と誕生……………(一一五)

◇嫁と娶……………◇出産

◇誕生日

弔問……………(一二二)

◇死亡通知……………◇接三
◇送庫……………◇伴宿
◇發音

交際上の注意事項……………(一二六)

結論……………(一二九)

日滿盟交の礎

或る民族が國民性を異にして居る他民族の間に伍して社會生活を営まむとせば、先以て、必要なることは、相手方たる異民族の風習、傳統、等に通曉することであらう。此の知識がなくしては、如何に其の民族が優秀で、且つは技能が具はつて居ても、我の善いと思ふことも、彼には惡しく、彼が好意でなしたる事も、我には不快に響く爲めに、知らず識らずの間に溝渠が出来て、種々の誤解が續出するから、假令一時は威力で押へ付けて一見成功したかの如く見えども、心と心の融和がない限りは、永久の大成は到底期し難いのである。

日滿支の關係は東洋永遠の平和の基礎として、和親の一路を辿つて行かねば

ならぬ。特に日滿は密切不離であるから滿州人には日本及日本人の美點を知らしめ日本人も亦滿人の習性を知りその良き點は學び、其の弊風は理解して後、漸次に改善に導くこと恰も子弟に臨む態度であらねばならぬ。

斯かる氣持で、日滿双方が努力する時、茲に初めて所謂、「王道國家」も現はれ、東亞の黎明の光は冲天の勢を示すであらう。道は常に近きに在る。日滿親善も卑近より初むることが最も効果的であると信ずる。

面白く話例

滿洲國新京公學校長大隈君は温良の教育者で、滿人父兄から非常に敬愛されて居る。數年前の話である。君が開原公學校長時代、一夕「日滿婦人會」が催さるゝ事となり、一切の世話を引受くることゝなつた。

そこで、同君は自分の奥さんを初め、日本側の出席すべき婦人を學校に集め

會合に必要な支那語を數時間正しく教へ込んで置いた。例へば

〇〇太太老没見

(tai tai lao mei chien)

〇〇の奥さん御久しぶり

座ります

這兒有地方

(che er yu ti fang)

こちらに席があります御

請坐

(chingts'o)

掛下さす

恁會說日本話麼

(nin hui shuo ji pen huama)

あなた日本語出來ますか

我也不會中國話所以困

私も支那語が出来ぬで困

難

na soi king nan)

つて居ります

有工夫串門兒來

(yu kung fuer ch'nanmen

暇の折は御遊びに御出

lai)

くだらさ

等と言ふ程度の言葉である。他面、亦滿人婦人をも集め、略同様に叮嚀に日本語を教へ込んで置いた。

さて愈々會が初まると、彼方の隅でも、此の席でもホヤ／＼の日満語が少しは戸迷ひして交換され、ソレが反て愛嬌になつて、東風樹梢を拂ふ春日の小鳥の囀にも似た和かな風情であつたさうである。

實際、人間社會の事は、古今東西、少し計りの言葉で、圓くもなり角も立つのである。それにつけても、汽車中などで、席を二人前も占領して居つて滿人が如何に困つて居つても全く見ぬ振をして居るのを能く見掛けるが、斯かる折彼方の一隅では

有地方請座 (yu ti fan ching tso) 坐席がありますよ御掛なさい

貴姓 (kui hsing) 君はドナタですか

恁上那兒去 (nin shang na er chi'ui) 何ちらから御出ですか

など話し合ふ人があると、滿人は同じ日本人でも、斯くも相違があるかと思ふであらうと想像すると感懐深いものがある。

滿人不快の種子

けれども、折角の言葉が非常に下卑であつたりしては反て惡結果を來す。夫れにつけても、滿洲視察者等が注意せねばならぬのは、滿洲には「日滿混合語」とも評すべき言葉があつて、大多數の日本人は之を使用して居る。例へば「ニイヤ」と言ふが、これは滿洲人には日本語と響いて居るらしく、日本人からは「御前」位のつもりである。「ニイ」は恁で「ヤ」は姉や婆やのやで、親しみある日本流のつもり、此の混合語を苦力にも小商人に女小供が使ふはよいが、相當の滿人にも濫用する爲め、如何ばかり彼等の不快を買つて居るか、測り知る可らざるものがある。

昨年、筆者は日滿教育會館の要務で、國都新京に赴いた時、一夕、同地の民間有力者に招かれた、その折、筆者は日滿親善の具體的實行運動の必要な

ること、其方策は理論でなく、手近い風俗や、習性を知ることであることを述べて、諸氏の意見を聞いて見た。するとSと言ふ日本語に巧みな有力者が

「私共も日満親善を心から希望して居ります。けれども困つた事には、此の邊の日本人は満洲人の氣持、風習を少しも知らぬ。吾々と苦力との區別すら解して居らない。例へば満鐵に乗る、満人で一等車に乗るからには相當の地位の者である。此の一等客が食堂車に行く、その折、丁度満員で、席がないとすると、ボーイは

ニイヤ、マンマンデー

とやる。眞に不愉快である。今少し鄭重なる言葉を使つたら、教へて置いたらと思ふ。

御覽なさい！ 満洲の中流以上の婦人で日本商店に買物に行く人は少いでせう。何故であるか？ と言へば、第一に、日本商店の店員は満人に對して

極めて横柄で、其の言葉は日本語だか、満洲語だか譯が解らぬ、ニイヤ、マンマンデーを頭から投げかけるからです。吾々は如何に日本を尊敬し、指導して貰ひ度くても、現在の如く吾等の風習を無視し、理解も有せず、種々不快なる行爲を毎日見せつけられては、私等の感情が理性を抑へ付けて終ふのであります。云々

と熱誠をこめて論ずるのであつた。本書の執筆の動機も實は主としてこれ等に因由するのである。

吉凶象徴の轉倒

習俗と言ふのは實に不思議なもので、例へば日本では「シメ縄」や「鶴龜」は神聖とされ吉祥と思はれて居るが、満人は「シメ縄」は不吉として十年前にも、これが原因で、奉天で血を見た事がある。又「龜は萬年」と日本人は誰も

目出度いと思つて居るが、滿洲では、小供が喧嘩して悪口、雑言をする場合最大の悪口には「忘八」(王八)と罵る、これは如何なる譯かと言へば龜は「大腰無雄」とて、古來より「龜籠には雄なく蛇を雄とす」と考へられ、姦通者の別名として居る。而して、此の姦通者たる龜は「忘八」即ち「孝悌忠信禮儀廉恥」の八大徳目の悉くを忘却して居る不都合なる奴と言ふことで、極悪のものとして居る。

一例が右の如くで、山河、傳統、環境を異にする異民族との接觸には事實問題として極めて六ヶ敷い事が山積して居るのである。だから

滿人と接觸し、日に相互に敦厚の交を加ふるには滿人の如何なる性情を有し、如何なる風習を有するかを、思想的にも、政治的にも、社會的にも、知ることが第一で、更に進んでは日常交際に必要なる具體的の言語及慣習に關する知識が必要であらう。

(上) 民 性 篇

滿洲の人種別

滿洲人と一口に言ふが、現在滿洲國內に居住する民族は、滿人、漢人、蒙古人、日本内地人、朝鮮人、ロシア人、以外にブリヤート族、オロチオン族、ツングース族、ダウル族、ソロン族、ゴルチ族等、種々なるものが居るが、其の實勢力を構成して居るのは我が日本人は別として、漢人及支那文化に合流し漢人化したる滿蒙人である。

滿蒙人の區別は今日も姓名等によつてなせば出来るが、言語其の他の所爲では滿漢一如となつて居る。特に漢人は山東省を主とし河北省其の他より移住したものが多から、北支とは風俗的には略合一して居る。故に筆者は、本書に

於て時々滿支人と稱し、時に支那人と稱するも、これは移して以て、滿洲人を律することが出来ることを讀者は先づ承知して貰ひ度い。

漢人化せぬ少數民族は事實上重要でないから、茲には省略する。

滿支人を支配する教

一體、或る國民の國民性を見るには、其の國民間に久しく行はれ居る思想、其の國民が多く崇敬する宗教、並に比較的近き時代の政治形態を知るのが最捷徑である。例へば現代の日本人の心の奥には古神道を主とし、佛教や、佛教藝術の思想と、儒教思想とが横はり、又表面明治以來の歐米文明と復古的の敬神思想とが織り込まれて、種々の形相を呈し、現代日本人を結成して居る如くである。

支那と滿洲とは清朝以前に於ては、勿論、民風も異つて居た。否、清朝末期

迄は、滿洲は封禁の地、即ち天領であり、漢人の移住を許さず、亦滿洲の子弟には尙武を奨励し文弱を戒めた事は、康熙帝の勅諭にすら見えて居る位で、兩者間は教育上にも相違があつたが、時代の推移に伴ひ滿人は衣服と辯髪とを漢人に強いた代りに思想や風習は漢人より拜借し、加之、清末より漢人が多數滿洲に入込んで終に今日の如く滿漢一如となつたのである。従つて滿洲の風俗と言ふも北支の風俗と言ふも今日は同意義となり終つたのである。

「支那は儒教の國である」と皮相者は考ふるかも知れぬが、孔子教は爲政者や權力者間に行はれ、其の政治に利用されたのみとも言はれぬことはない。四億の民衆の行事を律し、人世觀を教ゆるものは儒教ではない、實に道教なのである。

道教の開祖は老子とされて居る。道德經を見ると、第十八章には

大道廣有仁義 智恵出有 大像 六親不和有 孝慈 國家皆亂有 忠臣

同八十章には

使_レ民重_レ死不_ニ遠從_一 雖_レ有_ニ舟輿_一無_レ所棄_レ之、雖_レ有_ニ甲兵_一無_レ陣_レ之 使_レ民復結_レ繩而用_レ之 甘_ニ其食_一美_ニ其服_一 安_ニ其居_一 樂_ニ其俗_一 云々

とある。右を簡単に言ふと「大道が無くなつて天下が無道になつて居るから、仁義を云々することゝなるのだ。近親間が皆不和であるからこそ孝行などゝ種言ふ必要があるのだ。國家が亂れて亂臣のみであるから忠臣を云々するのだ。民をして死することなからしむるには、遠くに行かぬようにするがよし、兵備はあつても、その兵備を使はぬ様にするがよいのだ、人民は昔の如く結繩して書契の代りりとする様に素朴に教へ、而して只管に三度の食事を甘く食へさせ、美服をさせ、かゝる良俗を喜んで維持せしむるがよいのだと述べて居るが。此の教は時代を経るに従ひ、種々の迷信、仙術と結合し後漢の末には終に道教となつた。故に今日、滿支の民衆の年中行事や祭禮、其の他一切は悉く道教に基

因するのみならず、爲政者の多淫、亂行等も亦此の教へに因ることが多い。

道教の核心は仙術と「福、祿、壽」である。而して後者は全部の支那人の理想でもある。即ち一言にして言へば「出世をして高祿となり、精力旺盛にて長命を保ち、子福長者とならう」と言ふのである。

孔子は怪力亂神を語らず、未來を説かなかつた。未來がないから、現世の福祿が人間最大の希望になる。福祿壽のみが人間の最大の希望なる以上、「國家の爲めにとか」「國民の爲めにとか」の犠牲の精神が起り様もない。起るのは如何にすれば樂に世を過し、役人になり、高位に昇るかである。此の心術は專制政治の世には下僚をして上司の機嫌を迎へ、賄賂を贈り、君寵を蒙る事のみ專念する外はない。従つて、支那に於ては、歴代外形を整へふる儀禮、發表の方法たる文章が上手で、上司、君主に認められることが（易姓革命の當初は兎に角）平和時代には常に最も重要なことであつた。故に彼等は心にもない、庶

民救恤の名文は書いても、事實悲惨なる民の生活には何等の關心をも拂はなかつた。事實、張作霖も「出帥表」位の名文は時々出した様である。

民衆も亦、經典の文句などは勿論知らず、従つて治者の作文などに頓着はなく、現世の利益の福祿壽に精進するから他人の事などは顧みる必要もなく、一向に利福を専念して、そこで財力が出来れば、妻を迎へ、妾を貯へ子福長者となり、大家族とさへなれば、假令へば田舎に居住して、匪賊が來襲しても此の大家族で防戦も出来るのである。

だから、支那に於ては庶民は、役人に税は出すが、税で自分等の生活に何か利益ある施設をして貰ふなどとは昔から露程も考へては居ない。役人も亦税は自分等や治者の贅澤なる生活の爲めに取上るもので、社會の爲めに使用するなどの考へは革命前迄全然なかつた。事實支那の役人は妻、妾を多く貯ふる結果常に贅澤なる食事と婢僕が多い爲め、費用を要し、従つて苛斂誅求が甚し

い。軍隊は亦軍隊で古來から「良い鐵は釘にならぬ、良い人は兵にはならぬ」と言はるゝ如く、其の素質極めて悪しく、時に匪となり、匪は忽ちに官兵となる有様で、之を人民から見れば、文武の官吏などは等しく惡鬼の如くである。故に善政とか、王道政治とか言つても之を人民に答案させるなら「税をなるべく取らぬ政治」「自分等の生活に餘り干渉しない政治」と書くであらう。「無爲なるものは帝たり、爲して爲すなきものは王たり」とは正に此の氣持である。

形式と儀禮

支那は文字の國であり亦儀禮の國である。故に支那に於て公人たる者は能筆能文、悠悠温佳である。只夫れ表面閑佳である。

若し無遠慮に言ふならば、その能文は精神から游離して、只彼の知悉する美辭麗句を自己の本心とは無關係に巧妙に駢べたるものであり、その悠悠温乎た

る風貌の内裏には虚偽と、權謀と利己心とを巧みに禮教に包んで居るに過ぎないのである。文章と言ひ、儀禮と言ひ外形は眞に立派であるが、悉くこれ自覺せざる虚偽であつて、内心の利己心は袖の下よりチラ／＼見ゆるのである。

支那人は一體に社交が極めて上手であつて、舊式の文官などは經史の句章を暗んじて居るが、さて彼等が政權を爭奪し、相手を倒す手段の如きは日本人の如く直接法ではなく、例へば將を倒さむとするには馬を射る位ではなく、馬糧に毒をもつて先づ馬を倒し、次に將に及ばすと言ふ行き方である。

日滿の關係が今日の如く、日系官吏の勢力が逐次増進するにつれて舊來の惡習は漸次改められるであらうから、此の點では滿支は自ら別ではあるが、吾等が眞の日滿親善を招來するには是非共透徹したる滿人觀を有し、彼等の非を漸次に改める様に導くと同時に、其の術數に容易に陥らぬ丈けの聰明さは日系官吏は悉く有してもらい度いものと老婆心を敢て附加して置く。

國家觀念について

近來、滿洲では「滿洲人には國家觀念がないから、養成せねばならぬ」と説く人が非常に多いやうであるが、これは充分見透しをつけての話であるか、どうか筆者には頓と解らぬのであるが、由來、支那には幾千年來、今日世界で言ふ風な「國家」なる觀念は無かつた様である。今日多少でも存すと言へば、それは歐米の勢力が東漸して、倨傲尊大の老國民の一部が覺醒し、來てからの聲で、支那四億の民衆の九割は今も昔乍らの夢である。而して、此の夢が續いて居ればこそ、支那の亂暴なる政治でも、兎も角、一國の外形を不完全ながらも維持して居るとも言へる。

言ふ迄もなく、今日の國家の觀念は一定の領土と、人民と、主權とが構成要素である。然るに幾千年來、支那人は自分等の住んで居る土地丈けが中國であ

つて、其の四邊の住民は人間の顔をした動物と考へて居た。そこで、東夷、北狄、南蠻、西戎と蔑視し人間扱をせず、又「普天の下、率土の濱、王土、王臣にあらざるものは無し」とも考へて居た。従つて世界が中國であり、人間らしき人間は悉く中國人で、世界と支那とは異名同質と考へ込んで居た。此の信念は少し位の打撃では容易に動搖しないのである。蓋し彼等の歴史によれば、廿四朝の易姓革命があり、屢々北方の蕃民が來襲して、中國を統治しても、夷狄は何時の間にか支那人に化し、支那文化の讚嘆者となつたからでもあつた。

國家觀念がない以上、天下は彼等の居所である。従つて愛國など言ふ考へは起らない。又彼等は、民の信望を失ふときは天の命によりて爲政者は變革すると信じて居るから、之を反面より言へば、何人が治者となるもよい譯で、それが同民族であらうと、異民族であらうと敢て差闘はない。要は只、庶民の生活を安易にし、福、祿、壽を妨げぬ。爲政者が出て呉るれば夫れが王者であり、

仁君である。清朝は素より北狄であつた。その北狄が中國を征服しても、康熙帝の如き明君が出で孔、孟の道を宣揚すれば、彼等は「文王の再來」として敬崇の念措く能はざるものがあつたではないか。

日滿の將來を考ふる時、吾等は此の史的妙境を探究玩味すべきであらう。

一 盤散砂の國

儒教を上衣とし、道教を肌着として居る支那の社會相は表面禮教を重んじ、治國平天下を論じて、各人は内心に於て福祿壽に專念する。而してこの卑俗化せる道教は極めて迷信的、現世的、物質的で且つ消極的の利己主義でもあるから、社會聯體など言ふ考はない。元來、孔子教そのものが、社會聯體觀がないから、支那に於て社會協同の生活規則など起る筈もない。支那近代の人物であると思ふ蔣介石は先年「我が中國は一盤散砂の國である。セメントの如く緊

密に結合することが出来ぬ國民の集合せる國である。だから睨んでも長鞭馬腹に及ばぬ」と浩嘆したと言ふことであるが、事實、支那の社會相は有機的でなく、單なる砂の集合體となつて居る。故に例へば、北京でも上海でも上流者の芝居、料理屋、女郎屋と下層民の夫れとは全然區別されて居る。又主人は商店に行かず遊蕩三昧して居ても、番頭は不平も言はず、誠實に働いて居る。阿片戦争の當時であつた。英國の艦隊が北方では太沽を占領し、他方揚子江では長江艦隊で溯江して居る。その最中の話である。兩湖總督初め南方に在つた支那の大官は、此の敵國の英艦隊司令官を軍艦に訪ねて驩迎の意を表したので、流石の英士官連も驚倒した相である。又太沽でも、英兵の爲めに士民は土囊も築いたので當時の外人は眼を白黒させた相でもある。けれども支那の社會組織を知らば敢て驚くに足らぬことで、正しく一盤散砂で、彼と此とは何の關係もない、戦争があらうと、殺人があらうと、苟も自己の身邊に關係ない以上、全

く風馬牛である。實際彼等は金にさへなれば、一ヶ月三圓か、五圓で敵軍に雇はれても行く。而して勝てば掠奪が出来るのが何よりの心構であらう。

先年奉直戰（張作霖と吳佩孚との戦争）の當時、山海關附近では激戦があつた。之を目撃した、現滿鐵總裁の松岡さんが能く人に話すことであるが、

「俺も全く支那人奴には驚いたネ！ 何にしる双方からボンボン〜、ドンドンやつて居るのに、此方では支那農夫が啣煙管で悠々と耕して居る。何處を風が吹くかと言ふ風でネ、全く支那人はネ……」と

面 子

支那の上下は金錢は生命より大切にすると形容したい位であるが、その金錢にも増して支那の士人が大切にするのは「面子」である。此の面子と言ふのは「顔で」「顔を立てる」の意味で、日本でも顔役など存在するから、大體の氣持は解

せられるが、支那の此の面子は普遍的で如何なる社會層にもあり、且つその弊害は阿片や、麻雀と共に新支那の建設に著しく障碍を與へて居る。新人林氏 (Lin Yutang) の著「我國と吾が國人」(My Country and My people) の一節には下の如きことが書かれてある相である。

「支那は昔から今に至る迄、面子と言ふものに依つて支配されて來たのだ。此の面子と言ふのは心理上の語であつて、生理上の語ではない。洗つたり、剃つたりする面子ではなく、許可したり、剝脱したり、その爲めには戦争が始まつたり、音物として贈呈される面子である。漠然たるものでてあるが、支那の社交を調節する繊細なる標準でもある。

國都の官吏が時速三十哩に制限されて居る交通速度の場所を、六十哩で走らせる。それで彼は面子を得るのだ。人間を轢倒して警官が來ると、名刺を出して見せる。警官が敬禮して退く、彼の面子は一段と高まる。若し警官が承

知しないと「俺を知らぬか」と傲然と行過る、彼の面子は益々高くなる、警官が聽かずして運轉手を拘引する、すると、署長に電話をかけて、直に其の警官を免職させ、運轉手は即刻開放される、彼の面子は彌々高くなる。

面子は名譽とは違ふ、金では買ふことは出来ないが、それを得たものには多大の誇を感じしむる。中味の無いものではあるが、男は之が爲めに闘ひ、女は之が爲めには死する、面子となれば、道理も、習慣にも従はない、裁判もこれが爲めに延期され、家庭の財産はこれが爲めに蕩盡され、殺人も出来れば、自殺も出来る。無賴漢も之が爲に高位へ昇る、此の世の總ての持物よりも尊く、運や因縁よりも強く、憲法よりも重い。時に戦争の勝敗をも決し、内閣をも打倒す、支那人は總じて此のうつろなる面子の爲めに生きて居る様なものでもある。

だから、他人の面子を毀損するのは極端なる失禮で、面上に青睞を吐きかけ

るよりも悪い、多くの官人は主人役の面子を重んじて、一夜の内に三四回の宴席にも出席する。敗軍の將の面子を救ふ爲めに、當然免職か入牢と云ふ處をも彼の面子を毀さない爲めに、歐洲へ官費旅行を命ずる。一人の大臣の失態があつて、當然「免職」か「入牢」と言ふ處を彼の面子の爲めに内閣全部が辭職した事もあつた。一見、如何にも人情味が在る様だが此の面子を得るのが、支那人終世の希望であり、流石金錢にも代え難いものとされて居る。二人の兵隊さんが揚子江上の船に乗り、面子を楯に、硫黄を積込んだ船艙に入れろと無理を言ふ。而して船員の拒むを聞かず入つて、喫煙し、其の吸殻を、彼方ら此方らに放散したが、懸て船は爆破した。兵隊さんは面子は得たが、身體は黒焦げとなつた。教育ある支那將軍が、飛行機に乗つて上海に行かうとした、パイロットの拒むを聞かず面子で、規定外の重量荷物を持込む。而して見送人の面前で、其の面子を高める爲めに、旋回飛行を命令し

た。飛行機は充分離陸もせぬ内に、立木に衝突して、將軍は片脚を失つたが面子は高めた相である。支那では各人が悉く面子を失つたら、支那は本當の國家とならう。總ての官人が警察で面子を失つたら、交通は安全とならう總ての大官が法廷で面子を失つたら法治國とならう、夫れ迄は駄目である。云々

これは日本人の悪口でも何でもない、支那一流のインテリ學者が、その著書で、自國を慷慨して居る著述の摘要に過ぎないのである。

幸に、滿洲では、今やこんなことは無くなつた。吾人はこれを「物足らず」考へぬ様に滿洲大官に希望すると共に、滿人が如何に面子を重んずるか、日本人は能く付度せねばならぬ。

小供の面子

夫れにつけて、筆者は時折想ひ出すのであるが、滿支人と日本人とは子供の時から異つて居ることである。例へば

滿人の公學校（小學校）に學藝會が催される。兒童は歌つたり、御話をしたりして居る。その最中に視學とか、その他大人の參觀者が入つて来る。日本の子供ならば、此の知らぬ叔父さんの入來に顔を赤くし、折角今迄朗かに歌つたり、話したりして居ても腰が折れるのであるが、滿人の子供は全く正反對で、斯る場合、全然知らぬ人が入場すれば、する程、益々元氣を出して、大聲に、雄辯になつて來るのである。

又、夫婦喧嘩をして居ても、他人が居れば益々高聲にやる。

だから街頭で起る喧嘩など、來ては全く今にも殺人か、少くも血の雨を降らすだらうと想はれる喧騒さであるが、事實は、猫の喧嘩である。「上方の喧嘩」より一枚上手である。

支那の裁判

新聞や雑誌丈けを読み、教育ある支那の要人と英語で話をして萬事了承したと考へて居る支那通は兎に角、苟も支那や滿洲の民人の生活を少しく深く省察し居る者には、治外法權撤廢など言つても急に賛成は出來ぬのである。勿論今日の如く滿洲がなつた以上は滿洲は別事として讓歩してもよいが、支那の舊式の裁判と來ては全く怖れる外はあるまい。これは決して悪口ではない——事實だから——赤裸々に言ふ迄の話である。

支那で何が争か起り告訴となる知事とか何とか言ふ裁判官は先づ原被兩造の身元を調べ、財産を有するものを先づ敗訴とする、而して獄屋に下ろす。下獄者は必ず人を介し又は親類知己の努力で送賄をして釋放される。而して此度は必ず勝訴となる。

だから支那で裁判は日本以上に金が要る。金が要るのみでなく、不公平であるから、一般民人は裁判など神聖などとは露程も考へて居ない。出来る丈け仲間で解決する。だから支那では民間の和解、裁判が發達して居る。手輕るなものになると、町にある茶館ちやかんと言つて一種の民營俱樂部とでも稱すべき茶店があるが、そこに双方が行く。而して一方が堂々と争ひの原因を茶館に群つて居る民衆に懇うつかへる而して夫れが濟むと他方の者か立つて、これを駁論げろんする。斯くして民衆の賛否によつて正邪せいじやが決せられるが、其の間に於ける民衆の茶代は敗者が負擔させられる……誠に面白い話ではないか。

漁色

滿支を通じて、政道の腐敗を拔本塞源はつぽんさいげんせうとすれば、貯妾を少くとも日本の程度位迄にかくす社會風潮を起す必要がある。何故と言ふに、支那では大官は

多數の妾を持ち、婢僕べいこの數を要するから、勤務は怠り、家計は巨費を要する。従つて收賄しゅうわいも横行し、面子の必要も出來て來るからである。

一體、儒教は治者、權力者には好都合に出來て居り、男子には難有い教でもある。即ち儒教では君子、讀書人は人格を有して居るが女子や、庶民しよみんは蒼生そうせいであり青草であり小人である。一言にして言へば、非人格者である。斯ふ言ふと漢學者先生は、大に抗議を呈するであらうが、論より證據、支那の實相を視ればよい。千萬の抗辯、傍證ほうしやうは何の役にも立つまい。

周禮には庶人のみが、一夫一婦であつて、此を匹夫匹婦と言ひ、士大夫以上は妻妾併置さいしやうへいぢの原則を認めて居る。而して富貴の程度に従ひ、其の妾の數を増加するを許したので終に王者、皇帝に至つては、所謂「後宮三千」の娥眉がび其の寵を争ふに到つたのである。

これが爲め、支那の貴人、富豪は今日も猶妻妾の多寡を以て社會的地位を卜

する傾向がある。吾人が滿支人に接した折、往々
 「貴下は奥さんを何人持つて居ますか？」
 と怪しげな日本語で訊ねられて面喰ふことがあるが、これは單なるお世辭であ
 つて、少しく懇意になると、友人を遊女屋に案内して態々自分の女を紹介して
 呉れる親切漢も居る。

支那人の漁色は恐らくは世界一で、其の料理も、藥物も、悉く強精を第一と
 して居る。これが爲め彼等の人世觀は物質に墮し、自利に専念し、民族の悠久
 などに望を走せることはない。他面、彼等の生活費は嵩じ、身體は文弱に流れ
 武を貶し、收賄廣行ともなるであらう。

新滿洲國の青年諸君は、吾等の此の直言を諒とし、父祖の陋習より蟬脱せら
 れむことを切望する。

沒法子

支那人の性質、其の人生觀を知るに最も良いのは、彼等の間に行はれる「沒
 法子」と言ふ言葉である。これは「致方がない」「どうにもならぬ」と言ふ意味
 で執拗なる彼等も萬策盡きての「アキラメ」の言葉であるが、一度び沒法子と
 考へると、ソコは亦非常に徹底したもので、例へば盜賊や馬賊などが現に今刑
 場の露と消ゆる瞬間前でも落付拂つて居る。商人が倒産しても沒法子と考へる
 と餘り愚痴も言はぬ。

所詮、支那人と言ふものは世界で最も古き文明を有し、治亂興亡の跡に生れ
 たる民である爲めか、國家とか、政治とか、乃至幾多の人間社會の制約などを
 冷眼視し、超然たる趣もある。だから禮儀の煩鎖、自利我利の慾心、面子、
 沒法子等を一括して考ふる時、そこに漢民族の眞骨頭が現はれる氣もする。儒

教や道教の善惡兩面が具現されて居る氣もする。

苦 力

初めて渡滿した人々は大連の埠頭や、鐵道沿線到る處で人力車や馬車を挽いて居る穢らしい勞働者を見るであらう、これは「苦力」と言つて、山東省や、河北省の民が遙々渤海を越へて滿洲に出稼ぎに來たもので、今日の滿洲人の大半は彼等の祖父の仲間や又は其の同郷者が土着したものである。彼等の多くは春來冬去するを習とするが、追々は妻子も伴ひ移住する者でもある。

山東は往古・戰國時代の齊魯の土地であるから、彼等の内には孔子や、顔回の血を傳へて居る者が相當多い筈であるが、歲霜、幾千年。惡政と無教育とは聖賢の血族たる彼等を半動物性の下等人類に墮し了つたのである。想へば人間社會に於て、如何ばかり血よりも環境と教育が尊きかはこれでも證明されて居る。

る。

苦力は頑健の身體で、其の最強なるものは豆糟を七枚を擔ぐ膂力があるが、(日本人は三枚か四枚)怖るべき執着心で勞銀を貯へる。彼等の内には些細の宿料も節する爲め夏季には無宿で、材木の上、石段の上乃至路傍で眠つて自動車に時々轢殺される、

斯くして蓄へたる勞銀を歲末懷にして、山東の妻女の許に新春を迎へに歸るのである。

農 民

滿洲の農民は極めて、溫和で平和愛好者でもある。馬耕、牛耕苟も家畜を驅使することには神技を有つて居る。大豆、高粱を主として居る。滿洲の粗笨農業ではあるが、あの廣漠たる曠野を旬日を出でずして、播種、收穫を終る技倆

は日本農民が到底太刀打出來るものではない。

彼等の治安保障は村落が單位であるが利己心に富み、協同の觀念がない民衆の事として、決局頼みとする處は自分の血族より外にない。

大家族主義　そこで一族が集つて一部落を構成し居るので、滿洲の部落には「李家屯」「白家子」とか、同族名を示す部落が多い。又、一家は兄弟は勿論從兄弟等百人以上の血族が同一構内に居住し居るも稀しくない。片田舎に行くと、豪農の内には、其の四隅に銃眼があり。家には數十の武器を有し匪賊に對抗し得るのである。

只、感心な事には斯かる大家族でも肉親内に争ひが起らぬ、此點は全く敬服させられる。

支那でも滿洲でも、官吏と軍人とは民人から好まれぬ存在である。但、自身が官吏になることは儒教の教から當然最大の名譽とする。茲にも亦彼等の

利己的心情があるのであるが、夫は兎に角、兵と匪とは同質異名である。一體匪賊と言ふものは「清水の次郎長」「上州の政五郎」と同一であるから。日本人は何も奇異に感ずる譯はない筈である。恰も徳川時代旗本の跋扈に町奴が奮起せし如く、支那歴代の貪官汚吏に對抗するのが此の匪賊であつたのであるが、後漸く墮落して、各種のものが混入し小盜も政匪も等しく日本人は馬賊と言ふのである。

殺生　好まぬことも亦特色と言へよう。例へば盛夏の頃、川には小魚あり、庭前の樹上には鳥が巢を構へて居る。白鬍の老爺は長煙管で床几に掛け孫や幼児と遊んで居るが、鳥を追ひもせず、魚も捕へず、悠々自適し居る。彼等には政變などは風馬牛で、今も猶鼓腹擊壤の民で「日出でて作り、日入つて息む、井を鑿つて息ひ、田を耕して食ふ、帝の何の徳か我に於てあらむ」である。

數年前の事であつた、滿洲國協和會で、新國家の成立を「國民は如何に思つ

て居るかを」調べた事があつた。

「お前は新國家の名前を知つて居るか？」と尋ねる。すると分別面をした老爺は「さうだ相だ——今度出來たのは滿鐵國と云ふんぢや」

北滿などに行くと、「日露戦争の續きで」あつたり。今も「大清國が依然として存在」したり、種々様々のものがあつた様である。

商民—巧妙なる商賣道

滿支人は協同觀念に缺け、公共心を有せぬから大會社組織には未だ適しないが、普通の商店經營は極めて巧妙である。彼等は知友血族を以て互に匿名組合を組織し且つ従業員には極めて合理的なる利益分配法を行つて居る點では、我國の普通商店の遠く及ばぬ處で極めて文明式である。彼等の利益分配法の如きは歐米に學んだのではなく、全く獨創のものである。

此の匿名組合式と利益分配法によつて彼等の一店が失敗しても容易に倒産しない。又従業員も容易に不正を働くことが出來ない。これ等に關しては本書の目的でないから省略する。只此の際、一言附したい事は滿支人の商業上に於ける利益觀の一斑である。今、之を實例を以て説明する。例へば一人の顧客が店でビールを買はむとする場合。一本三十五錢の賣値で假に五錢の利益があるとす。若し顧客が「十本買ふから三十一錢にせよ、でなければ買はぬ」と言ふ番頭は眞實左様だと見るとマケルのである。然るに在滿日本商人は一本五錢の利ある以上少くとも十本で四十錢位利得せねば決して賣らぬ。此場合滿商人は九本で一錢利したと日本人は考ふるが滿商に言はせると、一本で五錢を利するより十本賣つて十錢利するがよいではないか。どうせビールは問屋から直に持つて來る。賣行が良ければ問屋は卸値を下げて呉れる。此の町中にビール屋が一軒ならば兎に角數軒ある以上一本賣るも十本賣るも手数は同様で一錢で

も多く利得する丈け懶巧ではないか。と

全く此筆法で滿商は行くから、後にはビールは原價で賣り空箱丈け利益すればよとの結論になつて、日本の小賣商人が太刀打ならぬ結果になる。これは滿洲事變前に我が同胞が商戰に全敗した理由でもある。

總じて、支那人も滿人も公人としては極めて頼もしからぬ人種であるが、一旦信賴した間柄となれば異國人とでも義兄弟の盟をする。之を換協(Hoan-sieh)と言ふが、斯うなれば其の義理の堅い事は日本人以上である。又、商業上に於ても、日本人より良い。只、日本の惡商人が悪い事を教へて一部のものは日本以上になつて居る者もある相であるが、滿洲で二十年來、滿人に卸商をやつて居る老舗の主人は著者に「滿人相手に商賣して居た者には日本商人相手は怖ろしくて手が出ませむ」と言つて居る。

馬賊物語

滿洲と言へば何人も直に馬賊を聯想する。あの永い永い冬が過ぎて雪解の水が流れ池塘に柳條が萌み初めると、ソロ／＼馬賊の噂が出る。日本内地に暮し遠く離れて居て夢の如く想ひを走らすと、廣い曠い沃野の西に紅い夕日が沈む頃、異形の一隊が野影、山陰に馬を打たせて悠々進むと想像すれば壯心は起り、詩趣も湧く氣持にもなるが、扱實際は怖ろしき存在であり、憐れなる彼等の實生活でもある相である。

現在、滿洲の最大問題は治安維持であるが、その治安に障礙あるものは此の匪賊である。今日の處、皇軍の奮闘に因つて、事變直後三十萬と稱せられたのが二萬に減少し、鐵道は大體安全となつたとは言へ、線路を離れて少しく行けば不安である。これが如何ばかり産業の開發に障礙を與へ居るかは想像以上である。

現今の匪賊は之を二種に分つことが出来る。第一政治匪、第二在來匪であるが、更に外形より分類すれば、徒歩匪、乘馬匪にもなる。

政治匪 とは筆者が假に命名したもので、これには種々ある。

- (1) 事變前迄は相當の文武官でありし者が、滿洲國に起用されし滿人要人と
の折合惡しき爲め反抗するもの、例へば李杜、鄧鐵梅の如き徒
- (2) 在來匪又は地方の土豪にして同様の反目又は反日觀念より反抗し居る者
例へば吳三勝、謝文東の如きもの

(3) 其他、共產匪及び宗教匪とも稱すべき團體にして反滿抗日をなし居る者
これ等は地方民の財物を掠奪するを目的とするものでなく、反滿抗日を旗印
として居るものであつて、大なるものは部下數千を有し大砲機關銃も有つて居
る。これ等が或時は直接に、又は在來匪を使喚して列車を顛覆せしめ「日本人
を殺せ」と慘劇を演ずる。皇軍が常に少數の部隊を以て涙ぐましい奮闘を續け

討伐を敢行し居るのは主として此の政匪である。

斯う言ふと此の匪賊は誠に立派の様に聽へるかも知れむが、元來、支那でも滿洲でも匪賊と兵隊は同質異名で、時來れば官兵となり、失意すれば賊匪となること恰も我が戰國時代の野武士同様で異なるのは其の品質が稍下卑なる丈である

在來の徒歩匪 馬賊は民間の惡黨仲間で、その活動は大體初夏に始まる。其の方法は年來所有し居る武器を秘密に藏したる處から持出し五六人乃至廿人内外で一隊を組織する。時恰も水沼には小柳が繁茂して居るから、晝は此の蔭に隠れ、夜になると一邦里又は三里以内の近距離の部落に掠奪を行ふ。馬賊は日本の俠客に酷似して各々繩張（邊條）を有し附近の無賴漢（要人）と氣脈を通じて居るから晝食は殆んど彼等より給せられる。又營口附近の如く江岸に居るものは帆船に據るものが多い。

七・八月になると高粱は身丈以上に繁茂する。彼等は「軟毛關門了」と喜ん

で晝夜の別なく各地に掠奪しまはる。而して九月末十月始に高粱が刈取らるゝが、其の頃迄に相當の収入があれば休止するが、若し不充分なる時は冬期の産物が出廻るのをねらつて、結氷期迄繼續する。結氷期には夏季の如き小部隊や徒歩では行動が不可能であるから「合局」と稱して、幾隊かの小部隊を併合し乗馬隊を編成する。而して目的を達し、一年の仕事を終る時、此を「棚局」と稱するが、これは明年度の爲め銃を嚴重に包装して、地下に埋むるか、又は他に密藏する意味である。

乘馬の匪賊 徒歩馬賊は南滿に多いが、北滿の曠野に於ては乘馬馬賊が多い。彼等は大部隊でもあり、其の繩張區域も廣い。

由來、馬賊は其の襲撃せむとする村邑そんいふに就いて充分の知識を要する。何故と言へば滿洲の各地には豪農があり、大家族主義の下に多くは二、三十挺、尠すくなきも六、七挺の銃器を有して馬賊の襲來に備へ堂々と迎戰ひいせんするから、彼等もウカ

とは行けぬ譯である。

馬賊の組織 馬賊には整然たる組織がある。即ち、頭目チヤンクイ（掌櫃）副頭目アール（二掌櫃）尖兵チエンチン（前衛子）第一隊トウトエ（頭隊）第二隊アールトエ（二隊）第三隊等の外に人質監視隊ヤインツファン（養子房）後備隊ホウクエリツ（後衛子）等より成つて居る。

又、頭目の下に左の如きものがある。

閑員 シエンユアン 遊撃又ハ位間増加又ハ歩哨線ノ監視等ヲ掌ル

水櫃 スイクイ 歩哨ノ配置等

梁臺 リヤンダイ 彈藥食糧物品ノ管理

馬號 マゴウ 馬ニ關スル一切ノ事務

先生 シエンシヨウ 帳簿係

權八門 トイバイン 易者一此者ノ言ニ從ヒ行動ス

把手 バシ 乾兒一七、八歳ノ小兒

掠奪行動 乗馬々賊は大部隊であるから、或る村邑を掠奪する場合には部下の一隊に「做事」なる號令を一下する其部隊は目標の部落に散開突入して人質や金品を掠奪して本隊に復するが、馬賊は時には「捐」^{チヤン}と稱して、直接行動を執らず、書面を以て一定の期間内に財物を提供すべき事を強要する。而して若し被強要者が應ぜぬ時に初めて襲撃する。

馬賊は口號^{カオハオ}（と合言葉）を使用するが、これは殆んど毎日の如く極秘に変更され外部に洩れない様に努めて居る。故に部下でも此の合言葉を間違へると殺されるのである。

一體、馬賊の使用する彈藥は密賣者連により賣付けられるものであるから、非常に高價であるから、大部隊の馬賊と雖、在來匪であれば軍隊其他兵力を有するものと交戦することは好まぬのであるが、茲に面白きは、現在の支那や事變前の滿洲に於ては馬賊と官兵との間に「討伐間」に商取引が行はれた事であ

る。

官兵と馬賊の商取引

馬賊が跳梁^{トウリョウ}すると張作霖時代でも省長や縣長は據^ユなく、討伐兵を差向けた。すると官兵と馬賊との間には何時となく、彈藥の賣買談が出来た。そこで、何千發かの彈藥は官兵の隊長から馬賊の許に送附され相當高價に現金取引が完了する。それが終ると官賊双方から數分間の間は照準も定めずに射撃交換があつて馬賊は退却する。而して其の退却に當り人質、銃器、馬匹を附近に抛棄^{トウキ}して行く。官兵は之を拾つて恰も奮戦後の戦利品の如く報告するのである。眞に愉快の話ではないか。

馬賊と官兵との交渉は數限りなくあるが何れも右と同工異曲で御互に「面子」を立て金儲けの妨害をせぬ様にする丈けである。

利益の分配 掠奪金品は全員の収入で絶対に私することを許さない。但し交戦の際箇人の勳功に歸する場合は此の限りではない。収入金の分配は時々之を

行ふが常であるが、或部隊にては解散時にのみ行ふものも在る。

分配法に二種ある。一を銃股（銃の株）他を人股（人の株）である。

人股配當率は頭目三株半、副頭目二株、下級幹部一株半、雜卒一株である。

分配は銃器に優先権があつて、一挺には何程と定められたる後、人株の配當がある。故に銃器が自身の所有なる時は二株の分配金を受ける。大頭目等は數十挺有して居るから分配率も自然多いが、銃器も持たぬ雜卒など年中辛酸を嘗め、生命を的にして働いても、一年の決算期に僅々二・三元に止まることも稀しくない相で、思へば人世は辛いものだと思ふ眼にも涙が浮ぶことであらう。

馬賊の數は事變後を絶頂とし、皇軍不斷の涙ぐましい働きで、今は數萬に減じて居る。彼等とても生業があれば、轉向するは明である。それについても民心が和らぐことが討伐と同時に必要なことで、それには矢張り彼等の風俗を知り慣行を解し、導くに其の方法を得ねばならぬ。

滿人を如何に指導訓化すべきか

叙上は滿支人の素描であるが、總じて滿洲人は大陸的で、悠悠天地と交はるの高風もあり、敬すべき、愛すべき點が少くないが、之を近世の文明國民に比すれば其の思想、傳統、乃至社會を構成する各要素が極めて弊害の深刻なるものが在つて、之を改めねば到底國家として、國民として自立自強となる譯には行かぬ。

然らば滿洲を開發し、滿人を指導すべき日本人として如何にせば可なるか？これこそ正に残されたる大問題である。夫れに就いて筆者は想起することがある。十數年前の話である。筆者は歐米を一巡しての歸途、ハワイの大學に立寄つた事がある。其の時筆者は大學の一教授に、

「土人の子弟とアメリカ人の子弟と何れが出來ますか」

と尋ねた。すると、教授は「それは米人が少しは良いが、一體、同一の教育を施せば人間は大體同一程度になるものだよ」
との答であつた。

世界で最後に鐵を知つた國民

之を歴史に徴するに現在世界に文化生活を營んで居る人類中、最も後れて、「鐵」を知つた民族は何れであるかと言へば、夫れはハワイ人である。

西歴一七七八年の事である。キャプテン、クック (Captain James Cook) が初めてハワイを發見した時、土民の驚きは非常なものであつた。彼等は平素「神は東海より來る」との神話を信じ居たのであるが、或朝の事、東方の海上遙かに、帆船が霧の内より現はれた。これこそ「浦賀の黒船」位の騒ではなかつた而して此の船人は「口に火を明滅させ、身體には穴があつて」曾て彼等が見た

事がない人類で、身體の彼方此方から種々の品を出入させるのであつた。全然衣服など知らぬ、赤裸々の土人にとつては實に煙草は「火を吐く」神の技であり、洋服のポケットは「神體の穴」であつたのである。そこで彼等はクックを神の降來と信じ土下坐して迎へ、出來る丈け神意に逆らはぬ様に努めたのである。

クックは土民の敬禮を後にして、野營を張り島の調査を一應済まして、さて本船に歸らうとすると、先に繋いで置いた「ボート」が無い、否、ボートは壊されて居たのであつた。

一方土民は、「神」が乗つて來たボートを、熱心に見て居たが、そこには非常に黒い堅い物がある、彼等は不思議に思つた。

一體、その時迄のハワイ土民は「鐵」なるものが地上にあることを知らなかつた。彼等は勿論、鬭争もし、戦争も絶えず行つて來たが其の武器は「鮫の牙」

であつて、これで槍の如きものを作つて、裸體の敵を突くのである。鯨の牙以上堅きものは彼等は全く知らなかつたのである。然るに今、クツクの乗船には「釘」が用ゐてある。その釘と鯨の牙とを試に比較すると釘の方が堅い、そこで、それが欲しくなつて神の小舟を打ち壊はしたのである。

一七七八年と言へば、僅々百五十年前の話ではないか。斯かる時代迄、鐵も知らず、煙草を知らず、衣服を一切纏はぬ野蠻人であつた此の土民の子孫も、米人によつて育成され、大學に學ばすれば、世界文明の先頭に立ち得る文化人ともなる——想へば「教育」と言ふものが、如何ばかり人類に大なる變化を興ふるかは、眞に驚くべきものである。

Civilization of Arrested Progress

支那人は世界に誇るべき古き文明の承繼者である。遺傳の法則が是認せるる

、以上、彼等が歐米文明の長を採り、自國文明の短所を補ひ、精進せば怖るべきものがあらふ。現に筆者が、叙上の如き、滿支人の描寫をなせば、新教育を受けたる滿支の若者は、感情上、大に抗辯したい氣が起らうが、筆者は事實を直截に究理して「善意の忠言」をなすのみで、滿支人を漫罵するのではない。只惜むらくば、支那の文明は過去に於ては「後向きの文明」であつた。歐米人の所謂「進歩を拘束されたる文明」(Civilization of Arrested progress)であつた、請ふ、見よ、儒者は口を開けば「先王の徳」を賛へ、「堯舜」を説き、治安を述べれば、「文武周公」を敬仰するのみで彼等の眼は常に後に向き、其の文章は自己の思想と游離し、虛偽偽善、因循姑息の風を養ひ、尊大の氣に満ち、進取の概を失つて終つたのではないか、而して、其の獨特の文明は一面、異常の「深み」と「趣味」とを有し以て別箇の形態下に複雑の流風を招來して居るか、之をハワイの如き文化の背景なき、民入に新文明を注入するに比すれば、

恰も白紙と古帳面とに新に字を書くが如き差が生ずるのでは無からうかと想はる。従つて、新教育の伸力も亦著しく阻害されるとも言へるであらう。現に中華民國成つて以來、歐米最新の制度によつてその學制も定められ、業績の一部分は見るべきものがあつても、傳統の陋習は容易に除去せられず、政治の實際は採長補短を適切に行ふ上に右往、左往する有様にも見える。蓋し、民國政府の一大憂患て筆者は同情を禁じ得ぬのである。

滿洲の青年に寄す

以上の如く述べ來ると、滿洲のインテリ青年中には之を讀んで反感を催し、「これは日滿親善でなく、日滿阻隔である」と感違ひする人も無いとは限らぬが、筆者には斯かる惡意は寸毫もない。只期する處は、個人であれ、團體であれ相互に親睦を交へる際、相手の長短を知悉すること、腹藏なく忠言も試みる

ことは、恒久の交りを結ぶ上に極めて大切であつて、生半可な御世辭の交換は何時迄も眞の盟交を招來するものではないと信ずるからである。

滿洲の青年諸君！今日は諸君の大部分は日本の眞意も解し、日本の指導の下に滿洲人を覺醒し、新なる活力ある國家を構成しやうと諸君は考へて居るであらう。事實日本は大にしてはアジャ民族の興隆に資せん爲め、又一つには舊來の陋習に苦む滿洲三千萬の民衆を文明の惠澤に浴せしめむ爲めに、財を投じ身命を賭して、諸君の爲めに働いて居るのである。今日に至つては、最早や滿洲と日本とは不可分の關係であるから、一日親睦を加ふれば滿洲の三千萬民衆は一日速かに幸福になるのである。然るに頑愚蒙昧なる徒輩の内には、今日も猶抗日の焔を胸に燃し蠢動するものがあるのは所謂螳螂の牛車に向ふものである。

滿洲は古來より支那ではなかつたのではないか。所謂東夷、北狄の地で、清

朝の盛時には純滿人たる旗人と漢人とは結婚すら認められなかつたではないか
 民國革命の當初のスローガンは「滅滿、興漢」ではなかつたか。

諸君は世界の歴史、否支那史を繙くがよい、國々の領土の色は常に變改され
 民族は或は合して國を建て、亦割れては異邦となる。滿洲國が新に成るのも之
 を人類の歴史より見れば其の一波紋であり、極めて自然である。無理からぬ道
 行である。然るに南方民國の新教育を受けたる一知半解の青年は例の如く悲憤
 し慷慨するも、自己頭上の塵芥を拂ひ環境の整理すらやらうとはしないではな
 いか。

言ふ迄もなく國家は民人に幸福を與へてこそ其の意義があれ、これが存する
 爲め民人は反て苦むならば、寧ろ無用と言つてもよい。支那の民衆が一盤散砂
 となつたのも淵源は國家の政治が悪かつたに因ると思ふ。

滿洲は事變後、未だ日本の眞意が萬人に徹せぬ爲め、多少の攪亂はあるが、

諸君にして眞に民人を愛し、陋習を打破する爲め日本に兄事し、其の指導を仰
 ぐ氣持になれば、日ならずして平靜となり、民は安堵し、匪賊は影をひそめ、
 鑛山は開發され、治水植林も行はれ、民は榮へ、村邑に喜色が漲るゝであらう
 現に澆角の地、關東州内の民が過去廿餘年の日本治政の爲め如何ばかり、幸福
 と安寧と富とを増進したかは、同地の故老に問へば判明するであらう。

況んや滿洲國は日本の屬地ではない獨立國として、諸君及諸君の仲間が文明
 人の指導者となる迄日本が後見役をせよとする丈けの話である。

人類學者に言はすれば、日本人も支那人も幾多の種別があらう。けれども、
 日本人は同一の先祖から分岐して來たと悉く考へて居る。これは勿論、學問的
 には誤謬であるが、國民としての感情としては無上のものである。滿洲と言ひ
 日本と言つても、言語が通じ、理解が充分出來れば、自ら親類の氣持にもなる
 吾等はこれを相互に期したいではないか。

盟交の途

政治は空間的である。思想は時間的に流れる。教育はその思想流轉の手段である。政治や事務は華々しい、けれども、少しく時間を経れば「重大事」が案外な事になつて終ふことが多い。反之、一見小事に見えたる思想が、非常なる結果を招くことは尠くない。

日満人間に眞に長短を知悉し、盟交の情誼が結ばるゝには、種々の方策もあらうが、所詮は愛と信とに基く教育である。兄たる日本が愛を以て缺點多き弟を指導すると同時に兄自身も亦反省して修養しつゝ進まねばなるまい。現に滿洲に居る人、滿洲に志す人々が勢に矯らず、謙虚の氣と精進の英氣を養ひながら進むことが極めて大切であらう。

(下) 交際篇

日常の挨拶

朝逢ふ時には家の内であつても一般に

恁起來了(nin chi lai la)

御早う御座います

恁早起來了(nin sao chi lai la)

同上

と御互に挨拶するのは日本同様であるが、婦人間では此の外に

恁梳頭了沒有(nin shu to la mei yu)

御髪を御上げになりましたか

恁梳上頭了(nin shu shangz to la)

同上

と御互に言ひ合つたり、適當に返事したりする。

日中又は晩に日本人は「今日は」「今晚は」と挨拶するが、此の言葉に該当するのは支那語にはない。支那や満洲では暫らく會はなかつた時には

恁好啊(nin hao a)

御機嫌よう御座いますか

と言ふのが最も多く用ゐられる。唯時間を見計つて

吃了飯了麼(chih la fan la ma)

御飯は御済みになりましたか

と言つて挨拶をする。これは敬意を表する挨拶であるから

偏過了(pien kuo la)

すませました

と答へて置けばよ。

就寝前には

恁請安歇吧(nin ching an hsieh pa)

御休みなさい

請歇着了罷(chinghsieh cho la pa)

同上

と言ふが、日本と同様である

夫れから別れる時には、普通

再見(tsai chien)

又御目にかゝります

と言ふが、明日とか明後日會ひますとの時は

明天見(min tien chien)

明日又伺ひます

後天見(hou tien chien)

明後日伺ひます

兩三天見(lian san tien chien)

二三日内に伺ひます

と言ふ風に用ゆる

初対面の挨拶

集會、宴會等の場合、知らない人に主人が紹介する。

這位是李局長(che wei shih Li chu chang)

這位是伊東先生(che wei shih Itong hsien sheng)

と双方に言つて呉れた場合は、御互に

久仰チウヤウ 久仰チウヤウ (chiu yang chiu yang)

御高名は豫てより承つて居りました

と言ふ定文句の挨拶をすればよし。

若し主人が紹介して呉れなかつたら、相手に

恧ニクイシ貴姓 (nin kui hsing) 御姓は何と言いますか

と先づ相手の姓を聞くのが禮で、この時先方は

賤姓某チエンシンマオ、恧ニクイシ貴姓 (chien hsing mou nin kui hsing) 私は某と言ふ。貴方の御姓は

の御姓は

と言つて必ず直ちに相手の姓を聞かねばならぬ。

滿支人は一體直接に姓名を呼ぶことは失禮とするから雅號ヤゴウを呼ぶのである。

故に姓を聞いた後に

恧ニクイシ台甫 (nin tai pu) 御雅號は

と尋ねる。此の際自分の雅號があれば

草字某々ソウジマカマカ、恧ニクイシ台甫 (tsao tzu mou mou nin tai pu) 私の號は某々です、

貴方は

と自分の字を告げて併せて相手の字を問ふ、すると先方は

草字某々ソウジマカマカ、貴處是那兒クイチュウシナール (tsao tzu mou mou kui shu she naer) 私の雅號

は某々ですが貴方の御郷里はどちらですか

と聞き、それから職業を聞くと言ふ風である。滿人の名刺を見れば一見明白なる如く右肩に職名があるが、左側下又は裏面には雅號と出身地とが必ず記入してある。この雅號を知つて置くことは極めて大切である。

訪 問

訪問の心得

滿民族は凡て「面子」を重んじ、儀禮を尊ぶから、相當の地位の人を訪問する場合には豫め先方の都合を尋ねて時刻を定むることの必要なるは勿論であるが、案内者又は從僕を伴ひ堂々として乗物にも注意して行く必要がある。これは徒歩で一人でテク／＼行く貧弱な客よりも自動車の訪客が世間の見へもよいからである。尤も御互が懇意の仲であれば勿論夫れには及ばぬ。

訪問者が案内人を連れて居る場合には案内人が先に行つて取次人に名刺を通ぜさせる。名刺を持たない時は名前を告げさせる。すると先方の取次人は客の名刺を持つて主人に客來を告げ正門を開いて客を待つ。客が門を入つて來ると主人側の取次人が恭しく客の名刺を捧げて客を客間に案内する。此の時主人が室外に出て迎へるが禮であるが、主人が直ぐ面會出來ない時は客に茶を出して客間に待たす。若し客が大門外迄來ても、門番の返事がない時には、客は乗物に乗つた儘悠然と其の返事を待つのであるが、要するに滿支人を訪問する場合

には日本人としての威嚴を損せない丈けの心構へは極めて大切である。

受 附

支那や滿洲では官衙・銀行、會社は勿論、上流の邸宅には必ず受附があつて、訪客は其の手を経ることになつて居る。

官衙の受附は其の格式によつて、承啓處(ch'on chi chu) 傳達處(ch'uan-ta-chu) 回事處(hoi-shih-chu) などの名稱があり、銀行會社等では多く傳達處、回事處と言ふ。公館(kong-koan) 個人(個人)の邸宅では多く回事處と呼んで居るが、これ等の處には承啓、傳達、回事等などが居て、種々の役徳を欲しがつて居る——夫は兎に角、若し訪問客が下の地位の人であれば名刺を出した後、主人が面會する迄、此等取次人の室に待たせられる。是れは「落門房」と言つて不名譽である。

主人が室外に出て客を迎へる場合には客が室門（大門）を出て迎へる場合には通過する門毎）に這入る前に主人に

請々チンチン (ching ching) どうぞ御先に

と言ひ、主も亦客に請々と言つて二三遍謙遜し客が先に入室するのが満支人の禮とする處であるが日本人はそんな煩鎖な事は一度位でよいと思ふ。

着 座

さて愈々、面會室に入つて着席する段になると、主人は必ず上座を指して、請座チンツォ (ching-tso) どうぞ御掛けなさい。

と云ふが、これが満支人間では余程親しい間柄でないと、客はそこへ掛けることを必ず一度は辭退する。それを主人が無理に掛ける様に勸めて「それでは」と言ふので、客も主人に「請座」と着席をすゝめ、主客同時に着席するのであ

る。馬鹿／＼しい氣持がせぬでもないが、滿洲や支那で客となる時は矢張り大切なる心得である。

客が這入つて來た時に丁度主人が執務中で席を離せない場合には

對不住トエフチヌウ、這就完チヨオチユクワン、僉先請座ニンシエンチンツォ (toi pu chu, che chin wan, nin sheu ching

ト) 済みませぬ、今終りますからどうぞ御掛け下さる

と言へば差問ないが、黙つて居るのは失禮になる。主人が請座と言はねば客は着席しないのが普通である。

主人が素足の儘で客に面會するのは非禮であるから日本人は特に注意を要する。

對 座

儀禮的の訪問にせよ、要談の場合にせよ、主客對座中は間斷なく茶、煙草を

勧められるが、其の際はボーイが勧める場合と主人がする場合とを能く區別し應對する要がある。即ち、主人が煙草を勧める場合に自分が持つて居ますと言つて自分の煙草を出して吸ふのは非禮であるから、少くとも最初の一本は主人が勧めた煙草を吸ふべきである。

日本人は時々客に煙草を勧むる前に自分が先に取つて吸ふが、あれは満支人には失禮になる。必ず先づ客に自づから取つて勸むべきである。

主人が客に煙草を進めたら自ら燐寸を擦つて點火してやるのは慇懃な態度でこの際客は頭を下げ燐寸を主人から取つて自ら付けねばならぬ。煙草を啣へた儘、主人に火を付けさせるなど勿論非禮の極である。

茶

主人が自ら茶碗を持つて客に進むる場合には客は必ず立つて受けねばならぬ

多忙の人に無用の長談をして長居するは満支共に矢張り儀禮に反すとして居るから注意せねばならぬこと勿論である。

退 出

要談が終つて客が辭去する時には、同等以上の客に對しては主人は大門迄送つて來て、客の車が動き出すのを見送つてから引返すのが本式であつて、主客の地位に非常の懸隔がない限り、又は主人に特別の事情がない限り、此の禮をとらないと傲慢であると思はれる。然し客が此習慣を知らないで、主人は最早や奥へ引込んで終つたと獨り合點して主人が後から送つて來て居ることに一向氣が付かず急ぎ足でサツサと歸つて終ふことが日本人には間々ある失敗だが、車中から見送りの主人に默禮して別れることが正式であることを忘れてはならない。

如何に禮であり、習慣であるとは言へ大門迄相當距離ある處を平氣で主人に見送らせる譯には行かない。そこで

僊請回吧(nin ching hoi pa) 御歸り下さる

僊別送了(nin pieh sung la) どうぞやめて下さる

と言つて挨拶する。又乗物に乗る時には主人に

對不住(tui pu chu) 失禮します

失禮失禮(shih li, shih li) 同

と言つて乗らねばならぬ。

大門迄でなくとも少くも主人は客間の門外迄は送らねばならぬ。でないとき甚だ失禮となる。

回拜(Hoipai)

吾人日本人間に於ては新任挨拶などの訪問を受けても余り答禮には行かぬのであるが、形式儀禮の八ヶ釜敷滿洲や支那では新任挨拶とか、敬意を表する訪問とかに對して回拜即ち答禮訪問を行はないと非常に失禮と看做される。

回拜の場合には本人自ら行くのが最も鄭重であるが、相當な代理者に自分の名刺を持たせても差問ない。又本人自ら行く時にも、其の家に上らないで名刺だけ置いて「回拜」或は謝歩(Hsieh pu)と言つて其の儘歸つて差問ない。回拜は訪問を受けてから成るべく二日以内に之を行ふものである。

回拜は親しい間柄で且つ先方の用事の爲めに特に訪問を受けた場合の外は必ずなすのが禮であるが、日本の要人を訪問した。滿洲の要人が「回拜にも來ない」と言つて、如何にも自分が輕視された様に考へて、不平を洩すと聞くが、滿洲國の日系官吏などは特に留意さるべきである。

其の他心得置くべき儀禮

起立の禮 滿洲や支那では自分が先きに室に入つて居る時、同等以上の他の客が這入つて來れば必ず立上し之を迎へる。又前述の如く、訪問の際などに煙草、茶などを主人自ら進める時は其の都度起立する。日本人が之を知らないで腰をかけた儘、別客を迎へたり、茶、煙草を受けたりすれば、彼等は矯傲なりと心中忌々しくも思ふさうである。

變な挨拶 滿洲人は吾々に對して余り親しい仲でなくても時折

恁貴甲子

(nin-koi-shia-tzu) 御幾つですか

恁一箇月賺多少錢

(ninkoyuechoungtuo-shao-cheng) 月給はどれ丈けと

りますか

など平氣で訊ぬる。更に面喰ふのは妻妾を何人持つて居るかなど問ふことがあ

る。變な質問と思ふが、彼等から言へば一種の御世辭であるから、よい加減の答をすればよい。

變な挨拶と思はれるもの 右と反對に日本人が老婦人の年齢などを御世辭のつもりで聞くが、これは禁物である。年下の者を捕へて「貴方は御若い俺の息子位にしか見えぬ」とも亦同様、相手に喜ばれぬ。酒に酔つて種々の事を述べるのは「日本では酒の上の事で」と一等減刑されるが、日本以外では先づ通用せない。酔つては人に見えぬ處に臥すのが禮である。

滿人は招待されても禮を後では言はぬ 日本人は招待された後御禮に訪問したり、又は會つた時に「先日は御馳走になりました」など言ふが滿支人は後日になつては斯かる禮は言はぬ。物足らぬ氣持がして「失禮な奴」と思ふのは彼等の習慣を知らぬから起る感情である。

支那料理の話

特 質

滿洲や支那を一寸旅行しても、先づ第一に必要なを感じるのは支那料理に関する多少の知識であらう。蓋し日本人同志間でも、又滿支人と交際する上からしても支那料理屋で食事することは極めて頻々であるから、一々の品名は知らなくても、大體の事は承知して置く必要がある。

木下謙次郎氏の名著「美味求真」の一節に曰く、

「日本料理は形式に走り、手續繁雜に流るゝところ、何となく官僚氣分を髣髴せしめ、西洋料理は民衆的にして實益主義なるも卑俗に流れ易く、支那料理は此の兩極の善惡兩方面を兼ね備へ、稍々もすれば亂雜に陥り易く、雅數

を缺く嫌あり。又宴會氣分其のものに就いては、支那料理は味に重きを置くが故に其の美によつて精神を爽快ならしめ惹いて宴席周圍の空氣を愉快ならしむる事を主意とし、西洋料理は先づ室内の飾立てを賑やかにし香氣高き花を卓上に盛り或は樂を奏し、人々皆盛裝して席に着き、給仕に至る迄禮服を着用せしむる等、先づ周圍の空氣を爽快ならしむることによつて食事そのものを美化せむとするものゝ如し（中略）又西洋風宴會にては、宴會を鄭重にする爲めには主として酒を選ぶことに注意し、支那は佳肴に念を入れ、日本は藝者の優物を揃へることに力を用ふ。故に或る宴會の價值を知らむと欲せば、西洋料理は其の酒によりて、支那料理は其の料理によりて、日本料理は藝妓の數によりて判ずるを得べし

又曰く

西洋料理は肉を主とし魚類や野菜は附屬の地位に置かれ、日本料理は魚類を

主とし、肉と野菜とは附屬たり。支那料理は肉に偏せず、魚に偏せず、總てのものを水火の力によりて調理するが故に材料の範圍は支那最も廣く日本之に亞ぎ西洋最も狹し。

又曰く

煮方として、支那料理は火力を利用して隠れたる本味を引出すことを主とするが故に、汁物多く、従つて長煮主義なり。長きは三日三夜に亘り火を絶たざるものあり、長く煮るは隠れたる味を引出す爲めなるも、亦肉を柔かにすることも其の目的の一なり 云々。

と以て支那料理の見當がつくであらうが、要するに支那料理は美味を主とし外觀は第二としたる極めて營養に富む熱い料理である。

材 料

支那料理の材料は極めて廣い。「美味求真」の言を借りて言へば、支那料理は「其の卓越せる調理の技倆と胃腑の力によりて昆蟲鬼畜の類に至る迄、一切のものを征服せざるなし」と言ふことであるから、一々之を擧ぐることは不能であるが、普通に用ゐられるもの下に擧ぐれば

水 産 物

燕窩 (yien-wo)

南洋の海岸に海燕が巢とせる海藻であると信

ぜられ、普通の支那料理では最も高價なものである。

魚翅 (yü-chih)

鱈の鱈の干物

海參 (hai sen)

「ナマユ」の干物

魚肚 (yü tu)

魚の浮袋の干物

海螵	魚骨	魚腸	鮑魚	干貝	龍蝦	大海米	蝦子	蟹	魚子	黃花魚	白魚
(hai cho)	(yü ku)	(yü chang)	(pao-yü)	(kan-pei)	(long hsia)	(tao-hai mi)	(hsia tzu)	(hsich)	(yü tzu)	(hoang-hoa-yü)	(pai-yü)
くらげ	魚の骨髄中の膠を精製せるもの	川鮫の腸の干物	あわび	貝柱の干物	車蝦 <small>クルマエビ</small>	小蝦	蝦の肚子	かに	からすみ	ぐち	白魚

滿洲人は鯛は好きぬが「ぐち」は非常に用ゐられる様である。

植物性

木耳	銀耳	竹筴	筍	山藥	玉蘭片	口蘑	冬蘑	冬茹
(mu-er)	(yin er)	(chu son)	(son)	(shan-yuo)	(yu-lau-pien)	(kou-mo)	(tong-mo)	(tong-ku)
きくらげ	白きくらげ	蘆の新しき芽	筍	山芋	筍を裂き干したるもの	蒙古産の茸	各地産の茸	椎茸に似たるもの

猪	鷄	鷄	鴨	鴨	鴨	野	鐵	鮑	鴿	等々
(chu)	(chi)	(chi-tan)	(ya tzu)	(ya tan)	(yieh chi)	(tie chiao)	(an chun)	(ko tzu)		
	鷄	鷄卵	あひる	あひる	あひるの卵	雄	雀	鳩		

獸 肉 類

豚—滿人の最好物。牛肉よりも高價である。

等々	菲	葱	黃	白	洋	腐	白	蓮	百
(chiu tsai)	(tsung)	(hoang-koa)	(pai-tsai)	(yang-fen)	(fu-pi)	(pai-kuo)	(lien tzu)	(pai ho)	
菲	ねぎ	きうり	はくろ	豆とうめん	ゆば	銀杏の實	蓮の實	百合の根	

鳥 肉 類

羊 (Yang)
 火腿 (huo-toi) ハム
 香肠 (hsiang-chang) 腸詰
 其他各種の臟物

但回教徒は絶対に喰はぬ。

蒙古人及回教徒好む

支那料理の種類鑑別法

支那料理のメニュー (菜單子 tsai-tai-tzu) を見ても文字は難しい、品名が驚くべき多数なる爲め何が何だか一寸判断がつかぬものである。そこで、大體の見當をつけるには「紅燒」、「炒」、「溜」、「拌」、「炸」等の文字の意味を知つて居れば、餘り甚しい間違は起らなす。

紅燒 材料を油でいためた上に汁をかけたもの。——例へば

紅燒包翅 (hong shao pao chia) 鱈の鰭の紅燒

紅燒蝦子筍 (hon shaohsia-tzu son) 筍と蝦の子の紅燒

炒 (材料を油で煎つたるもの) ——例へば

炒雞片 (chao chi-pien) 鶏肉を油で煎つたるもの

炒蝦仁 (chao hsia jen) 小蝦を油で煎つたるもの

溜 (葛かけ) ——例へば

溜魚片 (liu-yü-pien) 魚の切身の葛かけ

溜海參 (liu-hai shen) なまこの葛かけ

烤 (強火で焼いたるもの) ——例へば

烤羊肉 (kao-yong-jau) 燒羊肉

烤鴨子 (kao ya-tzu) 燒あひる

炸 (油で揚げたもの) ——例へば

炸丸子 (Cha wan tzu) 豚の肉團子の天ぷら
 軟炸鶏 (Joan-cha-chi) 鶏の天ぷら
 炸裡背 (Cha li-chi) 豚のロースの天ぷら

拌 (あへたるもの) —— 例へば

拌海蜇 (pan-hai cho) くらげのあへもの
 拌三絲 (pan san su) くらげ、肉類、野菜の

醬 (醬油で煮込んだもの) —— 例へば

醬肉 (Chiang Jao) 豚の醬煮込
 白醬鶏 (pai Chiang-chi) 鶏肉の

清湯 (水たきを永くしたるもの) —— 例へば

清湯鴨子 (ching tang ya tzu) あひるの水たき
 清湯鮑魚 (ching tang paoyü) 鮑の水たき

湯 (吸物類) —— 例へば

白菜湯 (pai tsai-tang) 白菜の吸物
 蘑菇湯 (muo-ku-tang) 茸の吸物
 蜜饌餡 (mi-chien) 餡煮
 蜜饌山芋 (mi-chien shan-yao) 山芋の餡煮
 例示すれば右の如くで大體見當は付くものである。

献立及注文並に勘定

支那料理は大體一卓 (i-chuo) が單位となつて居る。一卓とは一テーブルで十人が普通定員である。若し小人数であれば、前記の如く菜單子によつて注文すればよい。

成卓の料理は勿論種々の差等があり、土地によつて其の皿數も相違するが、日

本の料理屋で時折見る「松竹梅」と差等をつけて居る定食の如くで、普通三等に分れて居る。即ち料理の品々の内高價である品を中心として區別されて居るので、上等は「燕菜席 Yien tsai hsi」と言つて燕窩を中心とするものである。何も燕窩のみではなく鱸の鱠以下数々の料理が出るのである。次は「翅子席 chi tzu hsi」と言つて鱸の鱠が王座となるもの、最下級は「海參席 hai shen hsi」と言つて「なまこ」が中心となるのである。而して燕菜席が一卓四十圓ならば翅子席は三十圓、海參席は二十五圓と言ふ有様で皿數も亦違ふのである。

支那料理の最も正式なる献立は

第一 四冷葷 (Ssu-t'ong-hon)

俗に冷菜とも呼ばれ、肉類、魚肉に野菜を添へて出す。冷たい料理

第二 四兜 (Ssu-ton)

燕の巢、鱸のひれ、鮑、「なまこ」を夫れ／＼配した料理四皿

第三 四海碗 (Ssu-hai-wan)

大井に盛つた四種の料理

第四 四點心 (Ssu-tien-hsin)

菓子類四皿

第五 杏仁茶 (hsing jkn cha)

杏仁の粉に砂糖を入れて造つた飲物

第六 四飯菜 (Ssu-fan-tsai)

最後に出る飯の菜とすべき汁物肉類四種

第七 四京菓 (Ssu-ching-kuo)

果物類四皿

であるが、前述の三種の別により燕菜の折大皿でも翅菜の折は小皿となるが如く價格によつて或は省略され、或は代用の材料に換へられる譯である。

支那酒

支那酒は西洋種の如く多種ではないが、日本に比すれば多い、而して實際廣く行はれて居るのは、先づ浙江セツコウの紹興酒シヤウシンチウで恰も我が灘の銘酒の如くである。米で醸造されるが古酒程高價である點は洋酒に似て居る。「蘭陵美酒鬱金香、玉碗盛來琥珀光」と唐詩にある「蘭陵酒」を初め湖州コシウの南潯酒ナンジュンチウ、德州トクシウの蘆酒ルチウ等支那各地の名酒は滿洲には殆んどなく、大多數は前記の紹興酒シヤウシンチウ (Shao-hsing-chiu) で他は滿洲の地酒たる老酒ラウチウ (Lao chin) 及高粱酒カオリヤンチウが行はれて居るのみである。老酒と言ふのは粟で、高粱酒は滿洲特産の高梁を蒸溜じようりゆうして造つたもので、前者は紹興酒に似た下等なるもの、後者は泡盛で日本の焼酎に比し酒精分多く、仲々風味あるものもある。

支那料理の一卓の値は酒や飯乃至粥等カホは含まぬのであるから、支拂には一卓

の値より高くなる大體、支拂に一割のチップを副へるのが例である。

第五 宴會

請帖知單

日滿相互が親睦を重ねる爲め、支那料亭で宴會が行はるゝ事は益々増加するであらうが、此の場合に第一に日本人が是非共知つて居らねばならぬことは、自分が主人である場合、招くべき客は知人であらねばならぬと言ふことである。例へば新任の披露として、滿人を招く場合には、其の招くべき人には一往は挨拶に行つて後招くべきで、全然未知の人の招待状には支那人や滿洲人は出席しないのが慣例である。素より日滿の關係が今日の有様では滿人も或は出席するかも知れぬが、決して心より喜んで出るのではない。従つて折角の披露も其の

請帳の様式

謹於三月五日午後五點鐘樽候

張 民德拜訂

席設益盛飯店

知單様式

正

謹於三月五日午後五點鐘潔樽候

教 張 民德拜訂

席設益盛飯店

干 省長

金井廳長

馬秘書長

藤井局長

効果が尠いのである。

さて、宴會に人を招くには數日前に請帳 (ching-tieh) 及知單 (ch'i-tan) を以て通知せねばならぬ。請帳とは昔は紅唐紙ホンカミチに文句を書き、紅封筒に入れて送つた案内状であるが、今日は普通日本同様白の厚紙で白封筒に入れてある。

(第一圖參照)

知單と云ふのは同日に請待さる、衆客への連名回章で、料理店で招待する場合は其の店の者が持つて

金 會長
小林先生
近藤先生
原 先生
王 秘書

廻る。此の回章を出す所以は第一その招く主賓は誰であるかを陪賓に知らせると同時に豫め同席せらるべき人々を事前に知悉する便宜がある良法である。

さて、知單に接したる人は、自己の名前の下に「敬陪」「陪」「敬知」と記す。又招待を受けた本人が不在でも必ず行く場合は他の客が「代知」と記してよ。

主賓は特に「敬陪末座」と書くこれは他の陪賓に對する謙遜の意味である。若し主賓が何かの急務の爲め出缺不明の場合は一應「代知」と記して置くがよい。何故と云ふに若し主賓が缺席するとなれば他の陪賓がその爲缺席する虞があるからで、其の時刻になつて如何にしても出席が出来ぬとなれば電話の特使

を以て事由を述べ、缺禮を謝すればよいからである。
知單に記入が終つたら必ず使者に之を返さねばならぬ。

席 次 の 決 定

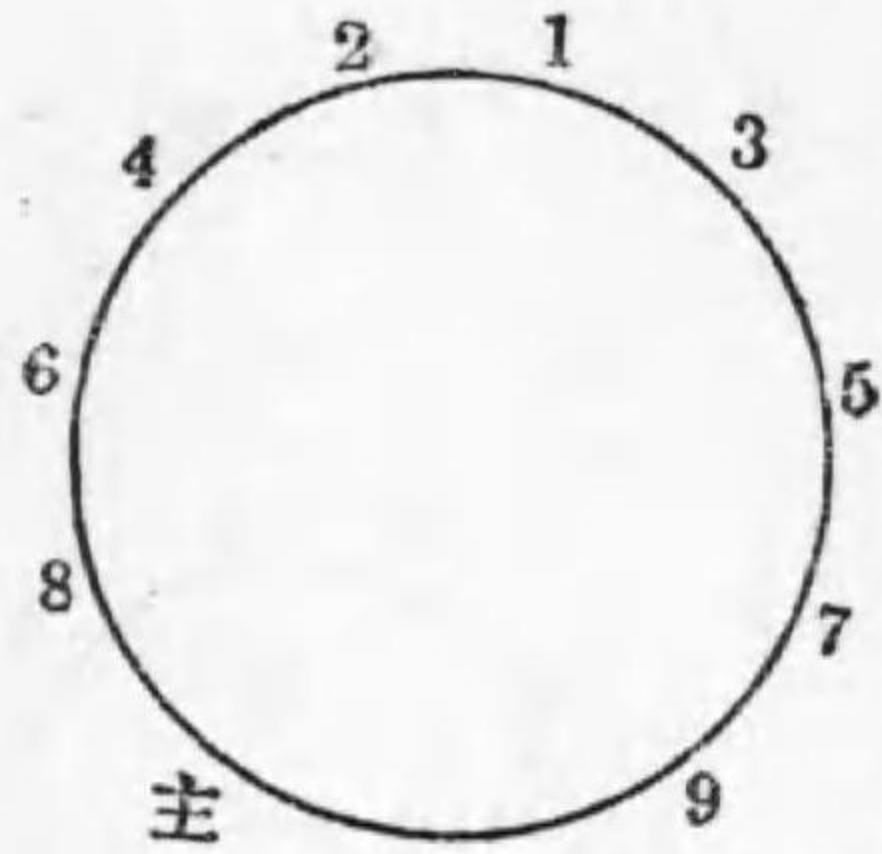
愈々當日となると、知單によつて座席順を料理屋に作らせ、開宴前に下に記
裁する座席順により席次を定めさせる。

又、待合室を適當に設け、定刻少し前になり、客が來初めると、料理屋であ
れば、立番の番頭が、王院長到、馬局長到と大聲で叫ぶから、主人は玄關又は
階段にまで之を迎へて

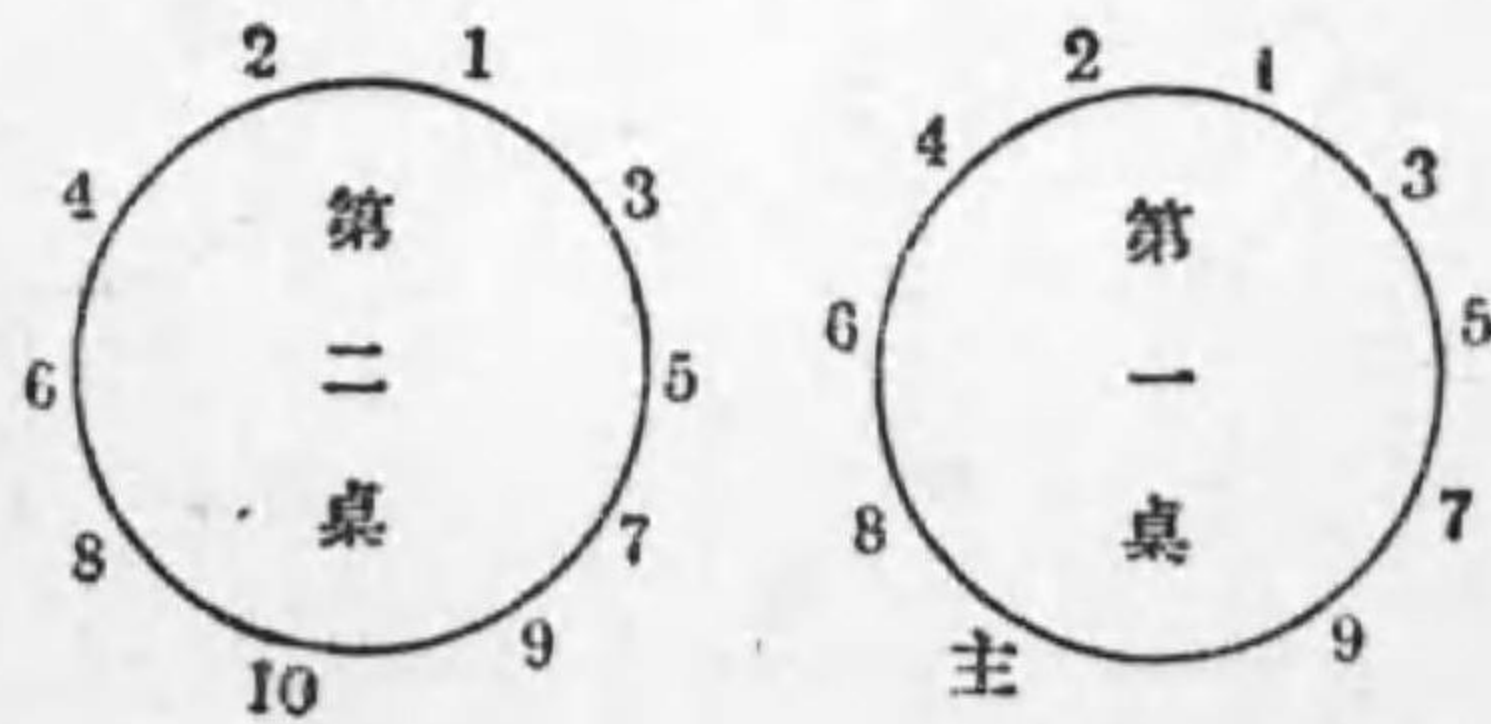
賜光賜光 (tzu-Koang tzu-Koang)

と謝して客を先に立て自分は後から隨行するのである。

第 一 圖



第 二 圖



備考 主賓ハ第一卓ノ(1)、主賓ニ次グ上客ハ第二卓ノ(1)ハ多數ノ席ノ時ハ大
切ノ客ヲ第一卓ニ案内スル、大體西洋料理ノ場合ト同ジ。

料理も整ひ客も大體揃つたと見たら、主人は客に向つて

開
宴

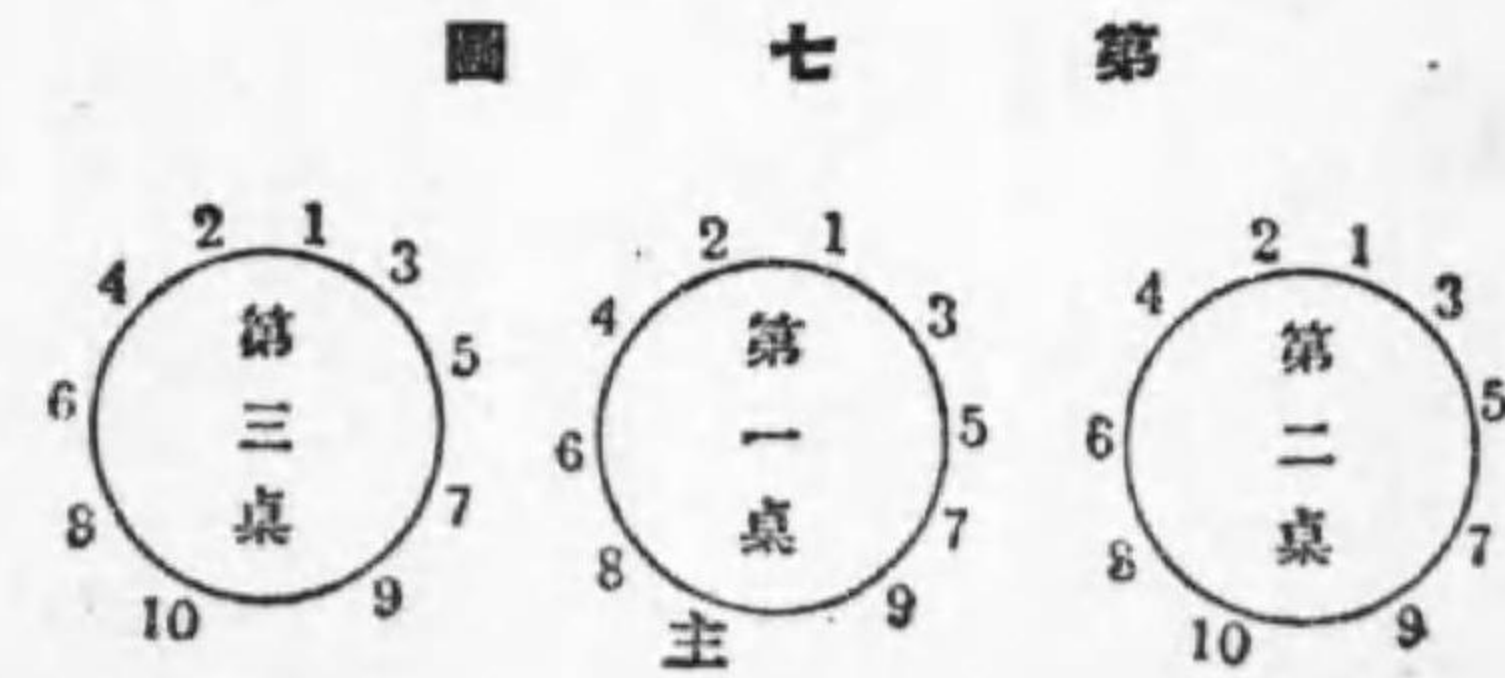
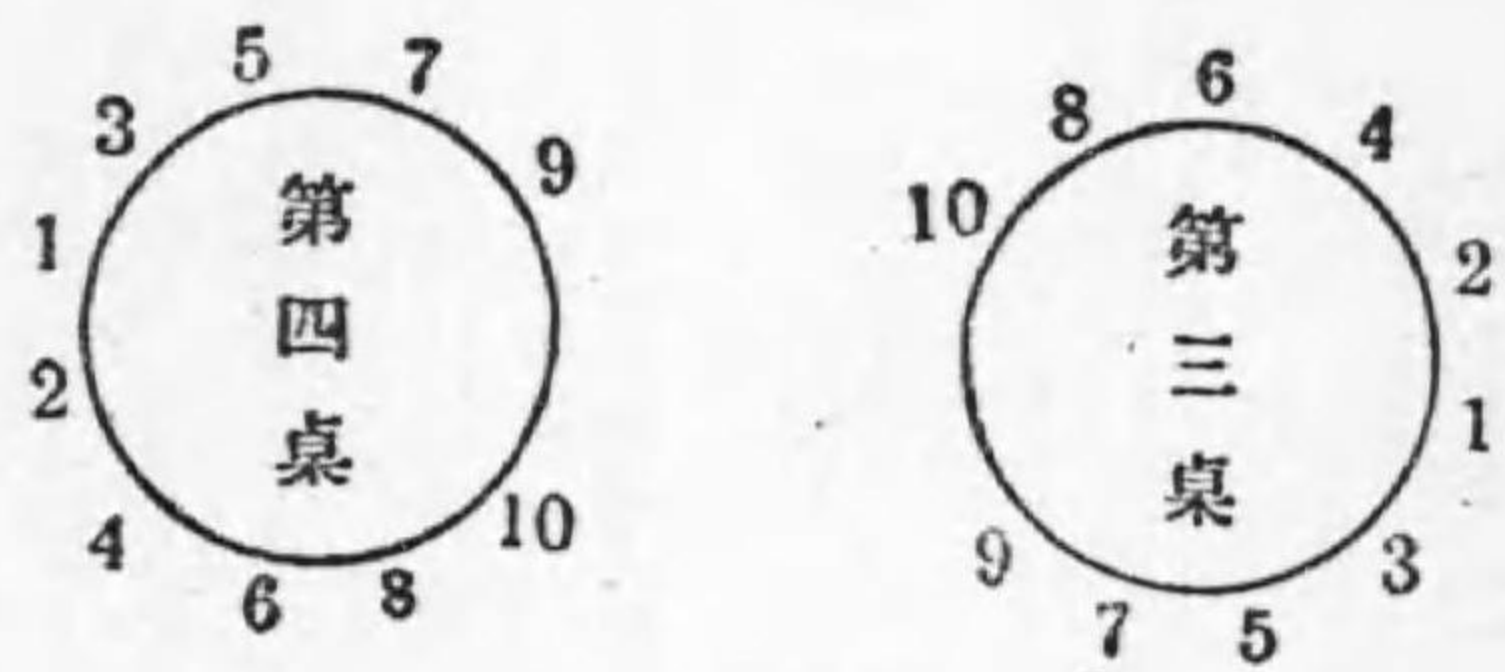
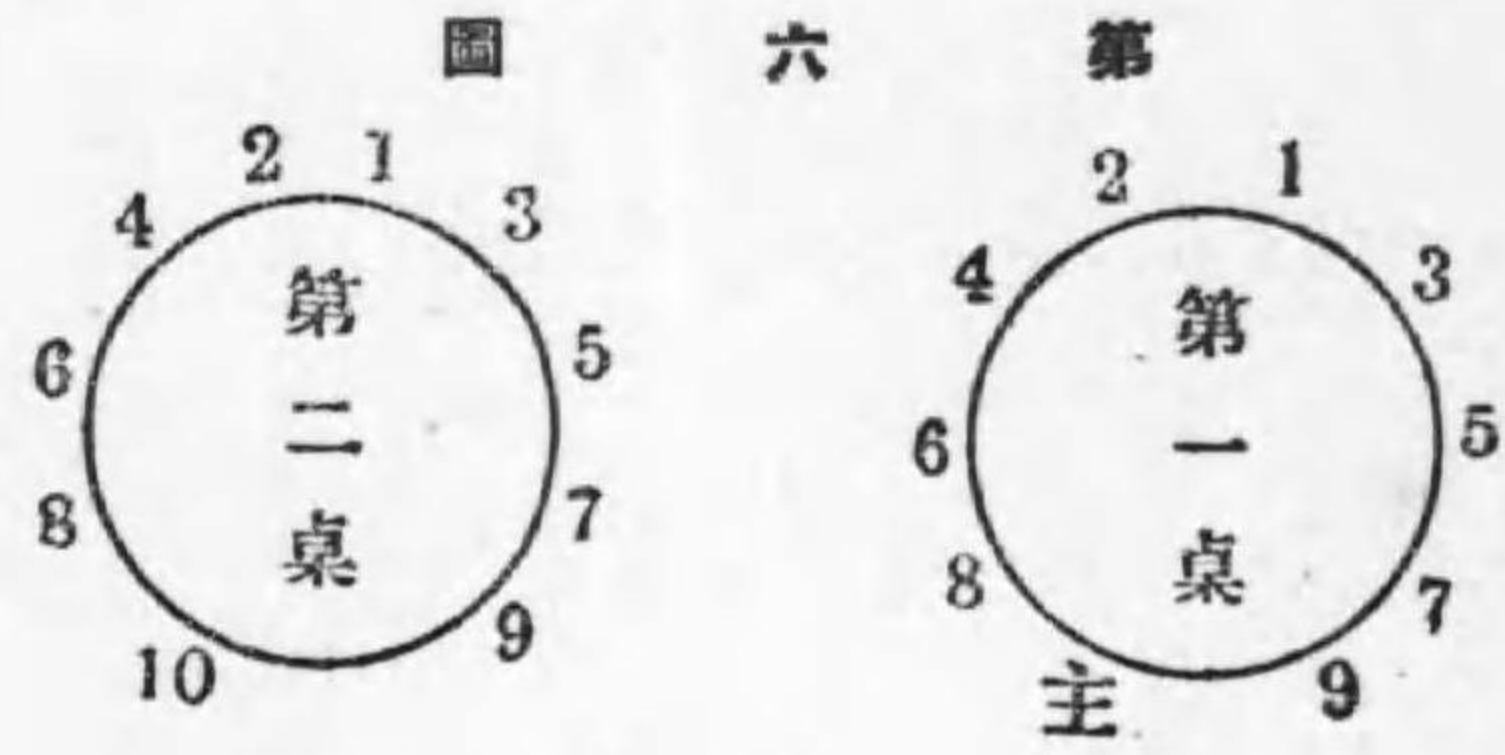


圖 三 第



圖 四 第

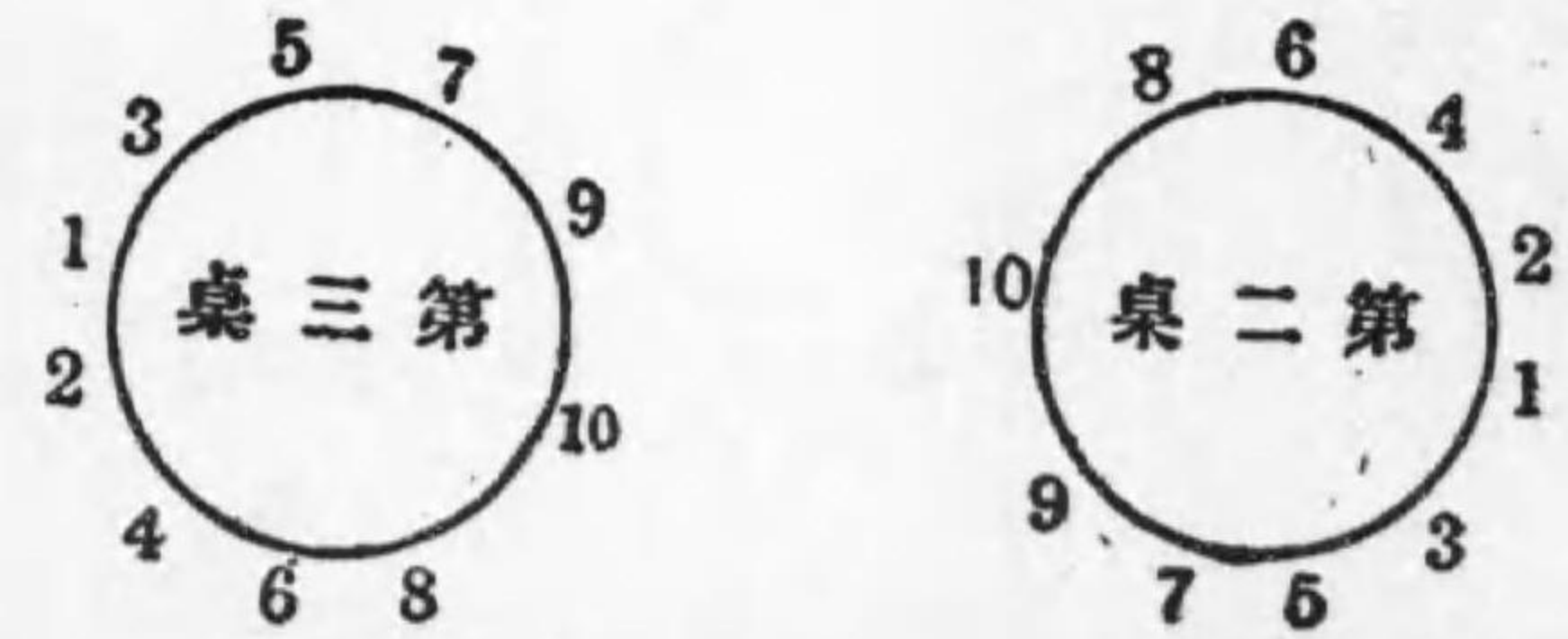
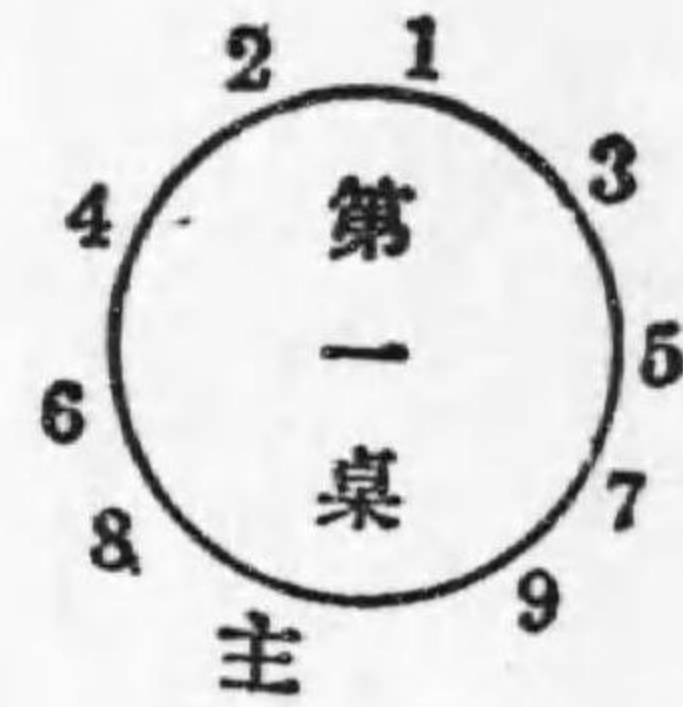


圖 五 第



請入席 (Ching-ju-hsi)

又は

請入座 (ching-ju-tso)

と着席を勧める。客は立上つてソロ／＼料理の在る處に進むのであるが、古風の主人だと主人が先づ手づから杯に酒を注ぎ主賓たる人を何某先生と第一に呼んで杯を置く。呼ばれた人は主人及び他の客に對して一讓してその席の側に立つ、主人は同様に順次に全部の客の席を定むるのであるが、斯かる鄭重なことは日本人が主人である限り、それ迄する必要はあるまい。坐席は名札にて定め一向に向ひ

請坐 (ching tso ching tso)

と言つて着席を勧めればよし。

一同着席し終つたら主人が杯を舉げて

請喝酒 (ching-ho-chiu)

と言ひ全客が杯を舉げ終るのをまつて、主人は又自分の箸をとつて

請吃菜 (chingchih-sai)

と料理をすゝめる之を敬菜と言ふ。これで開宴されたのである。

序に言ふが、客が大勢の場合は數人に別れるが、その際主人が一人の場合は各卓に主人代理 陪客 (Pai Ko) を頼むで置く。

主人は開宴中各卓を巡りて酒等を勧めねばならぬ。

挨拶をする場合

日本料理は開宴の初めに、西洋料理はデザート・コースに入つて挨拶するのが例であるが、支那料理には挨拶がないが、若しその必要があれば何時なすべからず、大抵は三番目の料理が運ばれたる時が適當と思ふ。

日本人の缺點

一體日本人は交際は極めて下手である。折角懇親を重ねようと招きもし、出席もしながら、さて開宴となつても話題が少く、愛想がなく、兎角日本人計り話合つて居る。これでは仲々日滿親善も行はれぬ。その點になると歐米人でも支那人でも極めて巧妙で、一言片句の日本語を使用しては笑はせたり、喜ばして居る。

特に滿支人は宴會に於て大に努め美味しい料理に朗かにもなつて居るから、所謂「酒令」(chiu ling) でもやつて在滿邦人が滿人と騒ぐ様にならねばならぬ。

酒令とは支那式の拳で種類が數々あるが、斯かることは筆紙では疊の水練で兎角役立たぬから、茲には省略するが、日滿親善上大切なることだけは特に明

言して置く

さて客が滿腹になつた時は箸を兩手或は(片手)に捧げて

「慢吃々々 (Mang chih " ") と一拜して卓上に置く時は後の料理は箸を付けなくても良いが、可成主人の面目を施す爲めには終席まで箸を離さず少し宛食べた方がよい。

料理の始めと中頃と終り頃とは熱湯で温めた手拭を客に出す。客は之を受取つて顔や手を拭く。

料理が出終ると主賓は主人に向ひ

用飯吧 (Yun fan pa) 御飯を戴きます

と言ふ。主賓が斯く言はぬ間は宴會は終ることか出来ない。故に主賓となつた人は特に注意を要する。

主人となりたる人は客が全部食事を終らぬ内に自分が先に終るのは失禮とな

る。

飯を食べ終ると粥が出る。それが済むと客は全部起立し、主人に挨拶して離席し別室に、又は別卓に歓談する。

客が辞去する場合、料理店であれば梯子段口、又階下であれば室外迄見送る序に重ねて言ふが、宴會に招かれての後日、日本人は主人に會ふと「先夜は難有う」と禮を言ふが、滿支人は決して言はぬ。だから、滿人は招かれて挨拶もしないと言ふのは無理解であると自ら戒めねばならぬ。

敬 稱

日本語で「あなた」に匹敵する語は

恁ニン
(nin)

である。これは男女共に一般に用ひらるること恰も英語の you で、恁老ニンラオ (niu lao) と言ふのも同意ではあるが其の行はれて居る範圍は前者に及ばない。

先生シエンシヤン
(hsien-shong)

は日本より使用範圍が廣く獨り教師等のみでなく、士人に對する一般的敬稱で日本語の「さん」と思へば間違ひない。これを姓又は字に附し孫先生、中山先生と稱するのである。

閣下コトシヤ
(Ko-hsia)

日本では勅任以上の文武官に對する尊稱とし、特に武官では極めて嚴格であるが、支那では此語は左程勿論振つた意味ではなく矢張り「あなた」の意味で、交際が深くない間柄に用ゐらるゝ堅苦しい敬稱である。だから滿支では閣下

と言はるよりは先生の方が親しみがある譯になる。

兄 (hsiang) と君 (chun)

これは日本と同様である。

大人 (tajen) 老爺 (lao-yieh)

共に下級官吏が上司に對し、又は婢僕が主人に用ゆる尊稱で鄭大人、張老爺などと用ゆる。

現職者への尊稱

日本でも海軍でに水兵が艦長を呼ぶにも艦長と云ふ丈けで殿などは附せない満洲や支那も同様で、總長閣下、師長閣下など、閣下や殿は附せない。

總て官職名を有する人に對しては官職名丈けで充分尊敬の意が具現して居ると考へられて居る。

序に、退職者に對しても其の人に敬意を表する爲めに、最後の官職名を依然呼ぶのである。例へば鄭前國務總理に話す場合「總理」と言ふが如くである。

商人に對する敬稱

經理 (ching-li) 副經理 (Fu ching-li)

經理とは支配人で、副經理とは副支配人である。李經理、張副經理と言へば日本語の李支配人さん、張副支那人さんに當る。「さん」丈けは日本が餘分である。

掌櫃的 (chang-Koi-de)

此の言葉は滿洲に於ては極めて亂暴に使用されて居る。例へば日本人紳士に對して車夫や滿洲庶民は掌櫃的と言ひ、日本の婦女子も「旦那さん」と誤信して居るから、日本語の「旦那さん」を使用する場合には此の語を代置する。けれども此の語は文字の示す如く櫃と言ふ字は商家の出納の箱であつて金錢出納係の上司を意味する。故に商人にあらざる者に之を用ゆるは非禮である。

商店の主人、支配人、番頭を呼ぶには姓を冠して呼べばよいが、一番頭、二番頭、三番頭と多數居る大商店では大掌櫃的、二掌櫃的、三掌櫃的と呼ぶのである。

日本でも西洋でも最下級の男にも「オイ大將」と呼ぶ如く小僧も「掌櫃的」と呼ぶのは、人情の極微だ。

兄弟を呼ぶ敬稱

長男、次男、三男の事を行^一 (hang-i) 行^二 (hang-erh) 行^三 (hang-san) と言ひ或は老大 (lao-ta) 老^一 (lao-erh) 老^二 (lao-san) と言ふ。

「坊ちゃん」「若旦那」に匹敵するは大少爺 (ta-shao-yieh) 一少爺 (erh-shao-yieh) 二少爺であるが大家族主義の支那や滿洲では髯の生えた若旦那が多いから、これ等には大爺 (ta yieh) 一爺 (erh yieh) 二爺 (san yieh) と言ひ李大爺と言へば李家の長男と言ふことになり、これが普通姓名の代用をなして呼稱されることが多い。

親友間

親友間では古今東西氣持は同一で、支那では字を呼ぶ、日本の如く姓を呼ぶのではない孫逸仙の親友なら「中山」オイ〜と呼ぶと思へばよい。

老兄 (lao-hsing) 老弟 (lao-ti)

自分より年長の親しき者を老兄、年少のものを老弟と言ふ。日本人の考では老弟と言へば變に響くも滿支人間では左様ではない。

未婚婦人に對する尊稱

「娘さん」の意に該當するのが姑娘クニヤン (Ku-niang) である。大姑娘、二姑娘、三姑娘と言へば長女、次女、三女の敬稱である。

右より少し尊敬して言へば小姐シヤオチエ (Lsiao-chieh) で、大小姐、二小姐、三小姐と言へば「上の御嬢さん」「二番目」「三番目の御嬢さん」の意になる。

夫婦自他呼稱

日本では夫婦が自分の相手方を他人に話す呼稱と他人のそれとは異にしてゐるが滿支人の妻は「太太タイタイ (Tai tai)」常に言ふ、全く同一である。

家族の第三人稱

他人の家族を呼ぶには「令」の字を附す

令尊リンフオン (ling tsuon) 御父様

令叔リンシク (ling shu) 叔父様

令正リンチヨシ (ling cheng) 奥様

の如く、又自分の家族には「家」を附す

家父チヤフイ (cha fu)

家師チヤシ (chia shih) 家の先生

令堂リンタン (ling tang) 御母様

令師リンシ (ling shih) 貴方の先生

令愛リンアイ (ling ai) 御息女様

家叔チヤシク (cha shu)

家姐チヤチエ (chia chieh) 姉

自分より眼下のものならば「舍」又は「小」の字を附す。例へば

舍弟シヨウタイ、舍妹シヨウメイ、舍姪シヨウウチ、小兒シヤオアール (息子)、小女シヤオニユイ (息女)、小孫シヤオスン (孫)

自分の死んだ家族を他人に對して呼ぶ場合、尊族に對しては「先シエン」卑族に對しては「亡ワン」の字を附する。例せば

先父シエンフー(死んだ父)、先母シエンムー(死んだ母)、先叔シエンシウ(死んだ叔父)、先兄シエンシヤン(死んだ兄)、亡妻ワシテイ、亡弟ワシアール、亡兒ワシアールの如し。

進物

支那民族は繁文縟禮はんぶんじゆくれいを好み、面子を重んじ精神と行動とが兎角游離して居ても、少しも苦にせぬ民族である。而して久しい間、專制政治の下に育つた爲めに、上長の意思で自身の榮枯かいく、浮沈は決定するから、自然、上長の意を迎へ、勢力家に迎合するのである。其の迎合の手段として賄賂が廣行し、而してその方法も非常に巧妙を極めて居る。書畫の贖物くわぶつや「マージャン」等が流行するのものは人間の弱點であるが、一は贈賄の手段に使用さるゝからでもある。支那に進物が多いのも、これ等種々の意味が含まれて居る場合が多い。滿洲國の指導者達は能くこれ等を鑑別して居らないと、不測ふそくの結果を招來せぬとも限ら

ぬ戒心すべきことであると思ふ。以下述る處はこれ等暗きものでなく、普通のものに止める。滿洲や支那に於ては、弔問以外の進物は凡て偶數で四の數が多い。これは獨り進物計りでなく、總てのものが一對となつて居る、家屋の構造庭園、裝飾の類に至る迄、日本の如く三幅對と言ふ如く奇數は好まぬのである。新年、五月節、八月節は民間の三大祝日で、商取引の仕拂時期でもあるから官民共に非常に重視する祝節であるが、此の場合には進物が行はれる。此の進物に對しては答禮すべきであるが、それ以外の病氣見舞、出産、結婚等の祝に對しては返禮の要はない。只之を記帳して後日先方に同様の事が起つた時、略同一價格の進物をすればよい。

進物の使者に對してはチップをやることを忘れてはならぬ。

滿支人間では蓋付の圓い菓子盆の様なもので直徑一尺位の容器を四、又は八箇に菓子や果物を入れて四盒禮、八盒禮と言つて、一對又は二對の盆栽などと

共に贈答するのである。勿論、季節によつて内容は相違するのである。

壁 謝

滿支人間でも、贈物が高貴に過ぎ、贈賄と推斷される場合には主人は其の贈物を受取らない事がある。之を壁謝と言ふ。

壁謝に二種あり、一は全壁、他は半壁と言ひ、前者は全部を拒絶し後者は、貴重品でない部分即ち土産物とか自筆の書とかのみ受取るのである。滿洲國の指導者は大に此の全壁を奨勵され度いものである。

年賀及年中行事

正 月

滿洲や支那の陰曆正月になると約一ヶ月の間、庶民は祭禮氣分で、學童までも殆んど缺席する。これは、約一ヶ月に亘つて種々の年中行事が行はれるからである。今、少しく之を述べて見る。

竈 祭

陰曆十二月廿三日に行はるゝ祭事であるが、實は正月の先行儀式である。兎角迷信盛んな滿洲や支那の事ではあるが、彼等の一家の禍福は竈の神の司る處であると道教に依つて一般に信じられて居る。

此の神は男女二柱で、男神を灶君、女神を灶奶々と呼び、年中一家の善行惡事を照覽して數へ上げ、十二月廿三日を其の決算日と定めて居る。而して此二柱神は此の日、玉皇上帝へ一家の年中の切過表を作製して上奏する爲め昇天するのであるが、その報告に依つて善行が多かつた家には翌年幸福が恵まれ、惡

事の家には災禍を下され、善惡折半の内には賞罰が無いのである。

そこで、此の大切な日として、竈の上には灶君の神像が貼られ、祭壇には菓子饅頭、飴を初め、昇天の旅費として元寶が供へられ、高粱の桿かきで造られたる馬飼料として枯草、水までも用意され、爆竹の音と共に香を焚き燭を點じて御祭が始められる。司祭者は一家の男子に限られ、婦人は干與せぬことになつて居る。面白いのは祭壇に酒糟や飴を供へることで、これは神様を酔はせ、其の口をネばらせて一家の悪事を上帝に述べさせぬ爲めである。

灶君の昇天する通路は煙突と言ふことになつて居る。千枚紙と言つて網狀の長い紙製の梯子が供へられる。

斯くて竈の神様は玉泉上帝の下に七ヶ日間滞留して年末即ち陰曆三十日晚に歸つて来て愈々其の家の新年の運命を司る爲め竈を護るのである。

春しゅん 聯れん

さて、愈々新年になると都鄙とひ押並べて、家々の門扉や、出入口には種々の貼紙がされて居る。黒いものは軍神とか、門神とかであるが、最も人の眼に映ずるものは「春聯」である。春聯は一名對聯とも稱し紅色の細長い紙片に、美辭麗句が一對となつて居る。例へば

天增福祿人增壽 春滿乾坤福滿門

而して其側には五福臨門とかの句がある。田舎の地主階級の家では

春前有雨花開早 秋後無霜葉落遲

など彼等の念願を詩句に宿らせて居る。

一般商家では「發福生財、大吉大利」など、赤裸々なる希望を大門や中門に紅い紙に見事な筆で貼付けて居る。

正月の行事は仲々あるが家堂と言つて祖先の靈を祠る處や、督財府と言つて福の神を祀る祭壇があるが、これ等にも所定の供物をなすのであるが、今は交際の見地からして、年始の挨拶を少し書いて見る。

正月の一日から五日迄、男は年始に廻る。之を年拜と言ふのであるが喪中の者は缺禮する。これは日本も同様で喪家には行かぬことに定つて居る。喪家には春聯がないから直に判明するのである。

年始客は名刺を受付人に出し、又は自分の名前を告げて主人に面會を求めぬのが、普通であるが懇意の間柄でなければ面會を求めぬでもよい。主人が出て來れば、互に

新喜々々 (hain hsi)

と言ふて、客は

我給恁拜年 (wo kei nin pai nieng)

と言ひ、主人は必ず

不敢當

(pu kan tan)

恐入ります

と言ふ、若し主客が對等の人で、主人が未だ客の家に年賀に行かぬ場合なら

不敢當

我還沒給恁拜年去哪

(pu kan tan wo hai mei kei nin pai nien chinuo)

恐入ります、私の方では未だ欠禮して居ります

客が着席したら茶を出す、日本の如く酒は出さない。

子供が拜年に來た時には菓子を出し且つ子供の歸りがけに錢を財布に入れてやる、又は紅紙に包んでやることになつて居る。年始は五日迄に全部返禮することになつて居る。眼下の者には代人でもよいが全然しないのは滿人は非常に失禮と思つて居る。

五 月 節

五月五日は端午節である。桃の枝にお猿の形を造つて入口にブラ下げる。又軒先に芥や菖蒲を挿して不祥や病災を追ふ呪ひとする。此の日小供達は虎を繪いた着物を縫付け、五彩の糸を頸から胸にかけ、病魔除けの呪ひともする。

此の御祭りは年中行事の最大の一だから、矢張り進物などが行はれるのが慣例である。

仲 秋 節

八月十五日夜の望月を祀る行事で、各戸庭前に卓を置き、月餅、西瓜を供へ毛豆、鶏頭花を供へて月の出を待つ、兎の繪を餅に繪き月宮殿の意で月餅と稱するなど極めて風流である。

此の祭にも進物の贈答が行はれる。四盒禮八盒禮などで果物が中味で、月餅もある。

三大節の進物を受ける人は必ず持參者に、連盒送（入物附）であるか否かを聞き、若し「不連盒送」であれば中味丈け取つて返さねばならぬ。

結 婚 及 誕 生 日

結婚は人生の最大儀式である。我が日本では其の形式は近時著しく簡易化して行くが、結婚そのものゝの大儀たるを没却する譯ではあるまい。

儀禮の國滿支に在りては結婚は上下貴賤共に仰々敷ものであつて、其季節になると銅羅や、紅蘭旗を押立て、數臺の馬車が支那音樂で耳も聳せむばかり賑々しく行くのを見るが、近時は上海邊では「文明結婚」が行はれて居るから、漸次變化するであらうが何れにせよ日滿親善上、これ等冠婚葬祭にも一往の理解を持ち適當の處置は必要であらうから、少し面倒であるが、舊式の代表的のものに對し交際上心得ふべき點を記述する。

結婚の場合は嫁チヤイ（嫁をやる）と娶チユイ（嫁を貰ふ）とは多少の相違があるが、双方見合が終り、媒介人を通じて「媒東帖」を交換し衣服料其の他種々のものを双方から送つて愈々結婚日が定まると、主人側は早く通知書を出さねばならぬ二三日前では失禮になる相である。

嫁の場合

嫁をやる家の主人は男家から送つた過禮（結婚一ヶ月前に男家から女家に衣服、裝飾品、豚、羊、鷺、酒、饅首を贈る儀式）物の中の豚、羊、鷺、酒、饅首等を親戚に分贈し、且つ結婚日を通知する。友人には過禮物は分與しないが通知は其の頃出す。通知書の名簿人は親又は親類で本人ではない。

通知を受ければ、祝辭を送る外、新婦たるべき人に化粧品、其の他を贈る。之を添箱禮アシヤンシヤンリと言ふ。贈る期日は勿論結婚以前であるが、箱に入れる時日を與へ

る爲めに早いがい。但し份金の金屬又は商品券等であれば當日でも差問はな
す。

娶の場合

嫁を貰ふ家でも早く客に通知を出すものである。通知者は本人で無い事は前同断である。通知を受けたる客は進物を添箱の様シヤンシヤンに急ぐ必要はない。喜悼シヤイ（天仙送子、麒麟送子などの喜字や吉祥繪）をやる場合はそれを掛ける暇を與へる爲めに二三日前に贈る方がよい。

支那風の上流では花嫁が來たら、直ぐ床の上に坐らせる。之を坐財と言ふ、その時間は、數分乃至一時間であるが、坐財後、花嫁、花婿は打揃つて家人に辭儀をする。これを分大小と言ふが、この分大小に對しては客は新夫婦に贈物をせねばならぬ。

主人側は客を饗應せねばならぬことは勿論である。

出 産

満洲や支那では家系なく、祖先の祭祀を絶つことを最大の罪障（罪いしよ）と考へ、人生の幸福の理想を、福、祿、壽に置き、子寶を其の第一として居る。出世して祿を得、健康にして壽命が續く限り子孫長久の爲め第二、第三、第四夫人を求め性慾を満足せしむるを「福」と深く信じて居るから、蓄妾が盛に行はるゝのであるが、子孫を増加することは一面から言へば生物の本能でもあるから、従つて子の無い女は三年にして去るとの非科學的理由も信ぜられて居る。それが爲めに、子なき女は「娘々廟（ニヤンシキミヤ）」に念願して極端な祈願をもする。

さて愈々、子供が産れると「洗三（シヤン）」とつ言て三日目に湯を使はせ祝をするが此の時は近親者のみである。

生後一ヶ月目を満月と言ふが、主人は親戚友人に通知する。此通知を受けた人は贈物を以て祝に行く、品物は子供用の帽子、衣服の類である。この際、主人は料理を出して御馳走することになつて居る。

誕 生 日

日本では誕生日を祝することは近時漸く行はれるが、全國的ではないが、西洋は勿論、支那や満洲でも大抵誕生祝をする。誠に良い事である。特に二十歳三十歳、四十歳等を整生（チヤンシヨシリ）日と言つて仲々盛んに祝ふ。

自分の誕生日には自分の名で通知せず、子供の名で案内するが。大抵の場合知友はその日を記憶して居て祝に行くのが普通である。だから交際の廣い家は「生辰單」と言ふ、親戚知友の誕生日一覽表が出来て居る。日本人間にも是非流行させ度いものである。

祝品として食料品、物品何でも差問ないが、地方によつては男の誕生日に男の使用物以外に夫人の用品例へば男の衣服一揃に女用の肩掛をも贈つて「双壽」を祝することもある。

招待状を出さない場合は兎に角として、正式に案内した場合は「壽星」を設くるか、これは或る一室の正面の壁に「壽星の像」(男の場合) 仙女の像(女の場合)を掛け其の前に卓を置き卓上には燭臺を置き料理を供へる。燭臺には必ず紅色の蠟燭が点火される。而して卓前には紅色の蒲團が敷かれる。

さて客が来ると主人は壽堂に案内する。客は拜禮し主人は像に一禮して後、客に饗應するのである。

弔 問

死亡通知

結婚に劣らぬ人生の大儀は葬式であることは説明を要しない事であるが、満支人は十歳未満の小供が死んだ場合は極めて手輕に行ふが、相當な地位にある人の死んだ場合は非常に大袈裟のものである。現に吉林、安東の如き材木の集散地は勿論、相當の都市にも棺桶専門の家があり、而して棺用の材木は最良の材質を使用するので高價である。満支人が葬儀に費す金額は巨額であるのみならず喪中の施主の行事など日本の比ではない。

さて滿洲や、支那で大人が死んだ時は通知は前後二回發する。第一は報喪條ハオウセンテウと言つて何處で誰が死んだとの通知である。第二報は一般に對する公式通報と

も言ふべきもので「訃問」^{フイクエン}又「訃告」^{フイカク}と言ひ死後三日目以後に出すもので、故人の官等、生年月日死亡の時日等をい書たもので、これは日本の死亡通知状と大差ないが、此の「訃告」^{フイカク}と共に「經單」^{チンダン}を附することがある。

此の經單と言ふのは「追悼讀經日程」とでも稱すべきで何日には禪經、盂何日には道經があると言ふべきである。一體、滿支では日本と異つて死んでも容易に火葬せず數日若くは數十日、數ヶ月棺に入れて安置するのであるからである。

さて、何れの通知を受けても、被通知者は弔問に出掛けるのは日本と異なる處はない。

弔問者から喪家に對する贈物は遺族に對しては奇數であるが、死んだ人の靈前の供物は偶數である。但、極く親近者でない遺族に送る要はない。

供物は支那式にすれば、紙製盆栽（四つ）紙製盆形（四又は八）花環等であ

るが、日本人より贈る場合は花輪か香奠でよいと思ふ。

香奠は藍色箋の黄色封筒に入れたるもので、圖示すると左の如きである。

奠〇〇元	(藍色)	(黄色)
	(藍色)	(黄色)

又、弔問に行く時に靈前に供物をせむと思ふ時は事前に喪家に届けて置く。而して供物が靈前に供へられた後參拜する供物せない弔問者は直に靈前に向つて拜

し、然る後、喪主に挨拶するのは日本と同様である。

接 三

滿支では人が死んで三日目には如何な貧民でも、必ず此の式を行ふ。即ち僧を招き、夕食後送三の式を行ふのである。

送三の式は死んだ人に金錢や車馬を與へる意味で紙製の車馬や紙製の金銀貨

を入れた紙箱を焼くのである。蓋し靈に送る意味である。

送ソウ 庫コ

接三後三日毎に送庫の式を行ふのが普通である。

送庫の式は故人の着物類と奇數に撰んで風呂敷に包み、板に載せて之を棺前に供する式である。右の風呂敷包は讀經裡に板に載せられ玄關を出て喪主之に續き、僧侶は讀經しつゝ喪の兩側に歩き、親戚はその後に従ひ、豫定の道路の真中に置きたる、紙製の棲庫の前に至りて前記の風呂敷包を載せたる板を其の上に置き、表主等は棲庫に向つて叩頭し、僧侶の讀經裏に之に點火し式を終る蓋し故人に金錢、衣服を贈るの意である。

伴バン 宿ソク

伴宿は出棺の前晩に行ふ式で遺族の告別式である。

發フエ 音イン

發音とは出棺式の意味で、遺族男子は棺前に歩行し女子は乗物にて棺後に從ふ。

一般會葬者は棺が城門を出る迄送るが、親しき者は墓地迄行くのである。

父が死んだ場合、其の喪は百日間（第一服喪期間）は外出しない事になつて居るから、此の期間は弔詞者に對して御禮廻りはしない。其の後になつて行ふ之を謝孝シヤウキョウと言ふ。

以上の外、種々なる形式があるが、日滿人修交上には大要右の如くで充分であらうと思ふ。

雜……日本人としての注意事項

(a) 洗足を出すな

滿支人共に皮膚は顔面及び手指以外は赤裸々に出さぬものと考へて居る。苦力の如き勞働に従事するものでも上半身以外は特定の作業以外には出さぬ（大連の豆糟工場の苦力など全身全裸であるが、あれは特別の例外である）然るに日本人は平氣に手足を出す。これは滿支人には極めて下品の事とされて居る。特に婦人が入浴後、帯も碌々しめず、洗足で居るのは滿人ボーイなど一種の興奮と誤解とを生じ、爲めに婦人が辱められ、殺されたる事件すらある。故に男子であつても、日本服を着た場合に、足や、足頸が現はれぬ様にすることは極めて肝要である。

(b) 酔つた上の話ではすまぬ

日本では酒に酔つた時は少し位亂暴しても、「酒の上の事であるから」と一等減刑されるのであるが、歐米でも、支那でも、酔間の所爲は減刑でなくて加増されるのである。日本人同志でも謹むべきであるが、日滿人宴會の折など特に注意すべきことである。

(c) 手紙に名を書かない事

日本では手紙や招待状等は勿論新聞紙上の人事往來、訪問記でも、滿支人の姓名を全部記入するが、これは彼等の好まぬ處である。例へば蔣介石は介石が名であるが、中正は字である。故に支那人は蔣中正と新聞にも書いて居る。手紙にも蔣中正と書くべきである。字又は號を知らない時は姓丈けを書くがよい

例へば滿洲國前國務總理鄭氏は名は孝胥であるが、號は漢人である。故に鄭漢人先生と書けば良いが、鄭孝胥先生では鄭氏は不滿であらう。漢人の號を知らぬ時は鄭先生とすればよいのである。

日本人は兎角、閣下と言ふ語を難有思ふが滿支人では大した敬意はない、總長閣下など正に閣下の蛇足だそくであることを再記して置く。

(d) 脱帽露頂

支那では古來より、室内で禿頭などを人の前に出すのは非禮とされ、脱帽露頂を忌んで居る。故に滿支人が支那式帽を冠つて居れば脱帽しないのが禮である。

結 論

滿洲や支那と日本とは衣食住を初め風習が著しく相違して居る。だから如何に努力しても完全に風俗習慣を知る譯には行かない。けれども人間は靈物で言語が通せず習風に相違があつても誠意が満ちて居れば必ず相手に感應するものである。

曾て日露戦争の當時英國の元帥キツチナール將軍が滿洲の幕營に兒玉總參謀長を訪ねた事があつた。我が軍の幕僚や通譯は多少心配して居つた相であるが、兒玉將軍は何思つたかツカ〜とキチナール元帥の前に出て握手を交はし、日本語で莊重に、堂々と挨拶した。素よりキ元帥に其意味が解せらる譯はないが元帥は大に感動して、後に兒玉伯の事を口を極めて賞揚し「一々の意味は解らぬが精神は通ずる氣がした」と言つた相である。

日滿支の關係も年と共に好轉せしむるには一面に於て日本人が無用の優越感を捨て相互に風俗、習慣等を知るに努力すると共に、兄たる氣分で誠意を以て

眞に面倒なる陋習を匡正もし、指導教育をすることが更に大切で、要は誠意を以て御互に相手の人格を敬し其の立場になつて考へてやることであると思ふ。

(終)

昭和十一年四月六日印刷
昭和十一年四月十日發行

日滿盟交の礎

定價五拾錢

著者 保一々隆 矣

發行者 東京市淀橋區西大久保二ノ二三六 富田廣吉

印刷者 東京市神田區錦町二ノ五 株式會社文成社 前田宗松

發行所 東京市淀橋區西大久保二ノ二三六 日滿教育協會出版部

發賣所 東京九段下 東京堂

電話四谷四七一三
振替東京四六〇二九

終

